最弱勇者レベル100

チチルチルチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最弱勇者レベル１００

【Ｎコード】
Ｎ９８７１Ｙ

【作者名】
チチルチルチル

【あらすじ】
アルカリス学園。世界で唯一の、魔王を倒し世界に平和をもたらす勇者を育成する為に作られた学校である。
そんなアルカリス学園に入学しようとした少年、トウヤは街中で一人の少女と出会う。
「あんた――魔王でしょ？」
元魔王の少年と魔王にしか攻撃の当たらない少女。その他が送る勇

者育成学園ストーリー。

「俺一般人なのに……」

『違うから！』

プロローグ

その日も、何も変わらない日だった。
いつものようにダラダラと過ごし、いつものように妹を可愛がり、いつものように何もしない。
それが少年にとっての日常であり、この世界のあるべき姿だった。
良く言えば平穏、悪く言えば何も無い。
退屈で怠惰で刺激の無い、楽しい日々だけがそこにはあった。

ある……はずだった。

辺り一面を血が覆い尽くす。もともと赤かったはずの絨毯も、血で更に赤く黒く染み付いている。
絨毯の上には原型もわからないほどに切り刻まれた何かの肉塊が積み重なっている。
古い建物独特の湿っぽい匂いや、それを誤魔化す為の香水などの匂いは既になく、鼻にツンと来る血の匂いのみが充満していた。

数時間前までは古いながらも極普通の建物だった。そこにいた者は皆笑い合い、冗談も交えながら談笑していたはずだ。
そんな皆が今は、どうして――！

「いい加減諦めたらどうですか？」

少年の意識が強引に現実へと引き戻された。

今いるのはある部屋の中心。辺りを血や肉塊、そして一人の男と

それに付き従う者達に囲まれている。各々の手には剣や斧など、誰かを殺傷する為の武器が。
男は年齢３０代ほどで、黒を基調とした神官のような儀礼服を身に纏っている。鎧ばかりの中で一人だけそんな格好をしてるものだから、自分が指揮官だと言ってるようなものだ。

対する少年は一人。
武器である剣は真ん中からポックリと折れ、とても戦える状態では無い。その腰には鞘に収まったままの刀があるが、今この状況では使えない。

絶体絶命のピンチ。常人ならば現状に絶望しガムシャラに足掻くか、諦めてその先に待つ未来を受け入れるか。どちらかを選ぶかもしれない。
だが、少年には絶対に生き延びなければならない理由がある。世界の王として、一人の兄として。
今この命を散らすわけにはいかない。

「貴方ともあろう方がこの様。既に貴方の時代は終わったのですよ？」

「……ハッ！　とか何とか言いながら俺はまだピンピンしてるぜ？多対一なのに余裕な俺の時代が終わるわけ無いだろ」

嘘だ。
刀は既に折れ、その体には致命傷は無いものの小さな傷が無数に刻まれている。体力も限界に近く立っているのがやっと。魔力も底を尽き最後の足掻きすら出来ないのが現状だ。
それがわからない男ではなく、少年もそれをわかっている。

「……見苦しいですね。いい加減、終わりにしましょうか」

男が右手を天へと向けるようにあげる。周りにいたその部下達は一斉に武器を構え、いつでも少年を襲える体制になる。

少年の体を冷や汗がツーッと流れ落ちて行く。

こんな所で死ぬわけにはいかない。何としてもここから逃げ出さなくちゃいけない。決して、生きる事を諦めたわけでは無い。諦めたわけでは無い、のだが……。

「……仮にこのまま俺を殺せたとしても、王族を討ったお前に従う者はいないぞ」

自分の死後を考えてしまう。

その言葉は男に対する最後の武器、最後の抵抗だったのだが、それはつまり自分の死を半ば受け入れてる事に他ならなかった。

ただ、それでもこの武器は強力な威力を秘めている。

王である少年を討ち、全く関係の無い者が王を名乗れば当然ながらそれに付き従う者達から反感を買う。最悪、そういった者達に今度は自分がやられてしまうかもしれない。

したり顔をする少年だったが、男は表情を一切変える気配がなかった。

……いや、微妙ながらその顔に表情が浮かんでいた。それは、どうしようと言った焦りではなく、気づかなかった事への戸惑いでもなく、苦し紛れの怒りでもなく、

少年に対する嘲りだった。

「……何か勘違いをなさっているようですね。私は貴方を殺して王になろうとしてるわけではありませんよ」

「……なに？」

カツカツと、靴の音を鳴らしながら男は少年の方へと歩く。
自分にとって最後の武器を使ったにも関わらず、余裕な態度を崩さない男に懐疑的な視線を向ける。

「なぜなら、王になるのは別の方。貴方と同じ、王族の血を受け継ぐ方なのですから」

「……っ！！
貴様、まさか……！？」

「ようやくご理解いただけましたか」

そこでニッコリと微笑んだ。
少年にとってそれは死を呼ぶ死神よりもずっと恐ろしい、自分の生死などどうでもよくなるようなものだった。
先ほどに比べ尋常じゃ無いほどの汗が流れ落ちていく。一滴、また一滴と。
滴り落ちる音が男の足音と重なり、感覚を狂わせて行く。視界がボヤけ、平衡感覚もいかれて足がふらついている。カラン、と握っていたはずの折れた剣が落ちる音が聞こえる。思考も定まらず、自分が今何を考えているのかさえわからない。

そんな少年の前に、男が立つ。
その手には細身の剣が握られており、切っ先を少年の胸――心臓へと合わせる。

「貴方亡き後、空位となった魔王の座を継ぐのは貴方の妹君であらせられるリィーン様です」

「さようなら」とニッコリ笑い、肉眼では捉えられないほどの神速の剣が少年の胸を貫いた。

おびただしい量の血が噴水の様に周囲に溢れ、血で汚れた床を更に血で汚して行く。

最初は感じた痛みも段々と失われて行き、熱さと寒さが一緒になって体を襲う。

そして、力が入らなくなり、スルリと零れ落ちる様に倒れ伏した。

こうして、魔王の少年――ハクトゥーリヤは死んだ。

第一話

世界は無数に存在する。

魔法のある世界、科学の発達した世界、気を操る世界。世界の数だけ様々な世界が存在している。

それは当然、魔王の存在する世界もあるという事だ。世界中にその悪行と悪名を轟かせ、魔物を配下におき、力の限り暴れまくる魔の王。

ただ、そんな魔王も一人の人間、勇者と呼ばれる存在に打ち倒される。そう言った世界も無数にある。

だが、そんなのはお伽噺になってしまう世界も少なく無い。

魔王の圧倒的な力の前に屈し、抵抗する力を失った世界。勇者となるべき存在が誕生しなかった世界。

そんな世界に住まう人々は、いつ来るかもしれない死という恐怖に震えていかなければならないのか？

いや、違う。

そういった世界を救う方法はある。

魔王を倒す勇者がいない。なら解決方法は唯一つ。

別の世界から勇者を連れてくればいい。

アルカリス学園。

そこは無数にある世界の中で始まりの世界にある学校。

別名、勇者育成高。

そこでは未来の勇者達が集っていた。

☆☆☆

「何だごらぁ！」

「やんのか？　あぁん！？」

二人の男が互いにその胸倉を掴みあい、低い声を響かせながら睨み合っていた。

場所は道の真ん中。ハッキリ言って迷惑極まり無いのだが、周囲にいる人の殆どは二人の様子が怖くて遠巻きに眺めているだけだった。「こっちには絡むなよー！」という心の声を表情に出しながら、素通りして行く。

一部、「やれやれー！」などと囃し立てる者はいるが、大体は無関心を装っている。

「てめぇ如きが調子にのんなよな！？」

「てめぇこそ、強いのは口先だけか？」

「何だと！？」

「元気な事で……人の迷惑とか考えろよ……」

トウヤもその例には漏れていなかった。
チラリとその様子を一瞥すると、深いため息と共にポツリと独り言を呟いた。
ただ一点、他の人達と違うのはこの二人が怖いんじゃなくて、ただ単にめんどくさいだけだ。めんどくさい事には関わらない。それがトウヤのモットーである。

それに、今はそれどころでは無い。行かなければいけない所があり、まだ時間には少し余裕があるのだが面倒ごとのせいで遅刻するわけにはいかない。
だからスルーするんだ！
誰かに言うわけでもないのに、そう言い訳して男達の横を素通りしようとした。その時――

「あんたら！　いい加減にしなさい！」

怒声が響いた。
毅然としたその声にトウヤが、男達が、周囲にいた人達が一斉にそちらを向く。

そこにいたのは一人の少女。
両腕を組み、仁王立ちをしながら男達を睨めつけている。状況的に見て、揉めているこの二人を見て止めに入ったのだろう。
だが、体格のいい男二人に比べると少女は小柄すぎる。女性にしては背が少し高いが、その程度である。スラリと伸びた手足にキュッと引き締まったウエストなど、女性が目指す見事の一言に尽きる美しいスタイルなのだが。いかんせん、こういった荒事には不適応な感じが否めない。

実際、周囲の人々は少女に対して「やめとけ！」といった視線を

向ける。この少女にどうにかできる問題では無いと判断したのだろう。
男達も同じで、不機嫌そうに少女へと標的を変える。……さっきまで揉めていたのに友人同士のように、通せんぼするように前に立つ。

（あの女……）

何か思うところがあるのか、トウヤはその足を止めてその様子を遠巻きに眺め始めた。

その少女は一言で済ますなら美少女の類に入る。
完成されたスタイルに負けず劣らず。キリッと整えられたその容姿は、可愛いと言うよりは綺麗と呼ぶのが相応しい。特に人々の視線を集めてしまうのはその瞳。青く透き通ったそれは、世界一綺麗とされる海よりもずっと深く、透明。少し釣り上がった感じが彼女の強気な姿勢、美しい強さをより一層引き立てていた。

だが、男達にはそんなことはどうでもいいこと。
ただでさえ互いにムカついていると言うのに、そこに偉そうな口調の女が現れた。
二人の怒りは完全に少女へと向けられていた。

「何だてめえ。アルカリス学園のエースとなる俺に逆らうのか？」

顔を数センチという所まで近づけ、ガンを飛ばすその姿はもはや完全にチンピラである。
だが、少女はそれに何の反応も示さなかった。怯えるでもなく、焦るのでもなく、怒るのでもなく、感情を無くしたかのように反応をしない。

まるで取るに足らない相手と接してるかのように。

「へぇ……あのアルカリス学園に入るんだ。やめとけば？　あんたらじゃ魔王どころかそこら辺の魔獣に食われるのがオチよ」

「な……っ！　て、てめぇ！」

男達の顔が茹でダコのように真っ赤になっていく。そのまま湯気が立ち込め、ピーという音が鳴りそうだ。

完全に頭に血が昇ってるのは誰の目から見ても明らかだった。

周囲の人々は「何挑発してんだ！　今すぐ謝れ！」と、顔を青くしながらその表情に書いてある。

だが、トウヤだけは違った。

トウヤはしっかりと感じている。少女から溢れ出す、圧倒的なまでの魔力を。

それは男達だけでなく、その周囲にいる人々全ての魔力を足しても余裕のある、まさに勇者なりえる強大な力。

それを感じ取ることのできない男達は所詮三流。少女の敵にすらなり得ない。

だからトウヤは少女の言動よりも、その魔力を、流れをジッと観察している。

「殺す！　今すぐぶっ殺す！」

男達は何かを口早に唱え始める。

魔法を使うための準備、言葉にすることで描く魔方陣、呪詛。

それは少女を攻撃することに他ならない。

それに気づいた人々は巻き添えを喰らわない様に慌てて逃げ始める。周囲が一気に騒がしくなり、トウヤに何人かぶつかって来たほ

どだ。
それでも、視線を一度も少女から逸らさなかった。
だからこそ気づいた。

少女が既に魔法を完成させてる事に。

「先に言っておくわ」

少女は右手の掌を空へ向け、自分の胸の前まで持ってくる。
手の上にあったのは一つの球体。いや、光とでも言うべきか。直径３０センチほどのそれは風船の様にプカプカと浮いている。

「今からする私の魔法を――絶対に避けなさい」

男達は「アァ！？」といった視線を少女に向けるが、その顔はみるみる内に青くなっていく。
「バカが、今頃気づいたか」と、トウヤは心の中で深くため息をついた。
さすがの男達（バカ）も少女が魔法に込めた魔力の大きさに気づいた様だ。
慌てて逃げ始めるが、もう遅い。少女の魔法はとっくに完成している。

「『閃光（テラ）』」

男達に向けて光の球体ごと手をかざすと、光は一気に膨張した。直径1メートルほどに膨れ上がり、その名の通り閃光の早さで一直線に男達へと向かい、

一気にかき消された。

「！？」

少女の目が見開かれる。よほど驚いたのだろう、数秒の間そのまま固まっていた。

そして、自分の正面に立つ、魔法を打ち消した乱入者を睨みつける。

「全く……俺一般人なのに」

そこには、深くため息をついた乱入者の少年――トウヤがいた。

第二話（前書き）

１２月６日脱字修正。
１２月９日一部修正。

第二話

少女はトウヤをギロリと睨みつけた。
その表情には警戒と驚きが7対3で含まれている。
それも当然。言動から察するに少女は自分の力に多大なる自信を持っている。そんな自分の魔法を一瞬で消し去ったのだ。さっきまでの余裕な態度でいられるわけがない。

「そんな顔してたらせっかくの綺麗な顔が台無しだぞ？」

そんな少女の様子を知りながら、呑気にそんな事を言う。
だが返事はない。野良猫のように警戒度マックスで睨みつけてきた。
トウヤは深くため息をつき、自分の右手を顔の前まで持ってくると、ペロペロと舐め始めた。見ればそこにはヤケドのような傷が残っている。先ほどの魔法を消した際に威力を完全に殺すことが出来なかったのだろう。
それを見た少女の双眸が細く鋭く閉じられ、トウヤを睨みつける。

「あんた……何者よ」

「何者って、そんなのただの一般人としか言いようが無いんだが」

「つくならもっとマシな嘘をつきなさい」

「嘘じゃ無いんだけどな……」

どうしよう、困った表情が浮かんでいる。

トウヤは面倒事が大嫌いだ。
憎んでいると言っていいほど大嫌いだ。
こんな状況になるのもめんどくさい。全力で逃げたいと思うのだが、全力で逃げるのもめんどくさいと言うダメなやつ。
実際、どうすれば楽に逃げられるかなんて事を考えている。

「明らかに嘘でしょ。私の魔法を消したんだもの。一般人であるはずがないわ」

「よく言うよ。さっきのは明らかに本気じゃなかっただろ。手加減してんだから誰でも防げるっての」

「少なくとも、そこでノビてる二人には無理ね」

少女が向けた視線の先を追うと、そこには白目をむき、泡をブクブクと口から出してピクリとも動かない男たちがいた。……実に見苦しい光景なのは言うまでもない。

「……いいえ、違うわね。人間には絶対に無理なことよ」

――ドクン！

心音が一気に高くなるのがわかった。
体が一気に熱を帯びていく。

「へぇー……まるで俺みたいな人間は相手にすらならないのか？」

「半分正解ね。人間だと相手をすることができないもの」

「相手をすることができない……？じゃぁ、俺もう行っていいか？相手にならないなら別にいいだろ」

「えぇ、別にいいわよ」

ホッ。

トウヤは心の中で安堵のため息をつく。

（危ない危ない……バレたかと思ったが、取り越し苦労だったようだな……）

クルリと１８０度ターンをするとそのままその場を急いで離れ――

「行っていいわよ。あんたが本当に人間ならね」

――られなかった。

誰かに掴まれたように足が動かなくなる。いや、実際に少女の言葉に体も心も掴まれている。歩き出そうとする体制のまま、銅像の様に固まってしまった。

その顔からは尋常じゃない量の汗がダラダラと落ちて行く。早くも水たまりが出来つつあるほどに。

そんなトウヤを見て、少女の疑問は確信へと変わった。

その表情には笑顔が浮かんでいる。満面の笑みではなく、意地の悪いニヤリとした笑みを。

「あんた――――――――魔王でしょ？」

その瞬間、二人を暗闇に満ちた球形がその内に取り込んで行った。

☆☆☆

アルカリス学園。勇者を育成する為の学校は今日、入学式を迎えていた。

『ワシが……ワシがこの、アルカリス学園の学園長じゃぁーーーーーー！！！！！』

突然の叫び声に、会場にいた人の殆どが一斉に耳を塞いだ。
その大声の主はと言うと、会場の一番前で何やら満足そうにウンウンと頷いている。その見た目は先程の声量からは想像できないほど年老いている。「皮と骨しか無いんじゃ？」と耳を塞いでいる全員が思うほど手や足が細い。とても、さっきの声が出るようには……出そうとしたらそのままポックリ逝きそうな老人である。

『今、ワシを見て気を抜いた奴はおるか？見た所、９割以上が油断しておったようじゃの。……まったく、先が思いやられるわい』

あからさまにため息をつくと一部の人達から「何だとー！」と怒声が上がる。

『何じゃ？今お主らはワシを見てどう思った？「うわ、こいつ弱そう」とか思わなかったのかの？それは単なる慢心にしか過ぎんよ。よいか、ここはどこじゃ？これから相手にするのは誰じゃ？それすらわからん奴に、ここにいる資格などない！』

老人の一喝に、怒声をあげた人達がビクリと体を震わせた。そして、バツが悪そうに視線を右往左往し始めた。

それを見ると、老人は再度満足そうに頷いた。

『わかってくれたようで何よりじゃ。

んでは、改めてワシがこのアルカリス学園の学園長であるジージジじゃ』

ブッ！

会場全体が吹いた。

『ワシの事は気楽に「お爺様」と呼んでくれて構わんよ。特に女生徒、パンツの色を教えてくれたら小遣いを――』

「犯罪です、学園長」

一人の男がジージジの言葉を遮る。

その男の登場に、ドン引きしていた少女達の表情が一気に輝いた。

男は長身痩躯だが身に纏っているスーツの下は鍛え抜かれた筋肉があるようにも見える。やや青がかった黒髪のパーマをしており、黒縁の地味なメガネだが整った顔立ちはその全てをプラスに変えていた。

「じょ、冗談に決まっておるではないか！ライザ君は冗談も通じぬのだな！」

「お前が言うと冗談に聞こえませんから、このクソジジイ」

ニッコリと悪態をつくライザだったが、それでも会場の熱気（主に女子）は収まる気配がない。いや、むしろ加速気味でもある。

「お主……今何か言ったかの？」

「何も言ってませんとも、えぇ。とうとう耳が遠くなるだけじゃ無く、幻聴まで聞こえるようになったんだなジジイ」

『……き、気のせいじゃな……ゴホン。話が逸れてしまったの。何の話しじゃったかの……そうじゃ、今日のパンツの色は――』

『学園長は年のせいでボケているため、ここからは私、入学式統括責任者兼戦闘総合顧問であるライザ・リュートより話させていただきます』

「いや、あの……ライザ君？」

「黙ってろ」

「……はい」

ライザが一歩前へと出ると、会場からは一気に歓声が（主に女子）沸き上がった。

それを全く意に介さず、涼しい顔のまま口を開く。

『世界は一つじゃない。無数の世界が世の中にはある。ここにいる奴らも、色んな世界から来てる事だろう。元老院のスカウトを受けた者、自分でここに来た者、様々な奴らがここにはいてその数だけ目的がある事だろう。

今から数十万年前、一つの世界が生まれた。それが今私たちがいる世界、全ての始まりであり中心である「真世界」だ。この学校はそんな世界にある。全ての世界の原点、全ての世界の平和を司る世界。それだけの力を与える事がこの世界には、この学校にはできる。

勇者育成学園、それがこの学校の別名。お前らは勇者になる。お前らは魔王を打ち倒す。お前らは世界を救う。だから――』

一旦、言葉をきる。

気付けばライザの雰囲気に押されて、会場の歓声も熱気も今は静けさを見せていた。

皆がライザの言葉に耳を傾け、一言一句逃さぬよう集中して聞いている。

ライザは会場を見回す。その全ての瞳は一つもそれる事無く、交差する。

『だから――この学園には弱者はいらない。強き者だけがこの学園に残る。今からその選定を、本当の入学式を始める』

会場が一気にざわめき始めた。
先程の歓声とは全く違う、戸惑いに満ちた生徒達の声。

ライザはその間だんまりを決め込み、やがてざわめきが収まり始めたのを感じ取ると話を再開する。

『今のお前達は正確に言えば入学候補生だ。色んな世界から才能のある奴らを約１０００人かき集めた。残念ながら三人ほど来てないようだが、才能のある奴は探せばこれだけいる。いや、上限を決めなければこの数倍はいるはずだ。
だから、才能の次に必要なのは応用能力。いくら才能があろうが、強大な力を持っていようが、扱えなければ意味がない。それをこれから、確かめる。
これに合格できないような奴はこの学校にはいらん。さっさと自分の世界に帰れ』

「――ふざけんな！お前達がここに連れて来て、合格できなきゃ帰れって？どんだけ人をバカにしてんだよ！」

怒りが頂点に達した少年がライザへと突っかかり、前まで出て来てその胸倉を掴む。
そんな状況になっても、ライザは眉一つ動かす事無く、目の前の少年を無感情な目で見ていた。

「相手を恐れずに挑む姿勢はいい。だが――」

「あぁ……ぁ……あ？」

ライザの体が一瞬、輝いたと思ったらその瞬間突っかかっていた少年の体が、糸の切れた操り人形のように力無く崩れ落ちた。何が起きたのかわからないと言うような表情をしながら、意識が飛んでいた。

『相手を見極める力ぐらいは持とうか。本来の試験とは違うが、一人脱落だ。

さて、流石に命を落とす事はないが、ケガの一つや二つ、負っても仕方ない試験になる。棄権する奴は今のうちにしとけ。受ける奴は前に来い』

そう呼びかけるが、今の光景を見たショックか、候補生達の間には戸惑いと迷いが生じる。果たしてこのままここにいていいのだろうか？声には出さずとも、表情がそう語っていた。

恐る恐るといった様子で、数人が前へと歩いてくるのがわかる。だが、残りの人達はその場から一歩も動く気配がなかった。

『……何だ、この程度か？所詮は思い上がりの塊か……しょうがない、今年はこれで――』

「遅れましたあああああああああああああああ！！！」

勢いよく扉が開くと共に、少年の声が会場全体へと響き渡った。
突然の出来事に生徒達は勿論、ライザまでもが驚いた表情をしてそちらを振り返る。

「遅刻しました！！すいません！！」

「うるさい！少し音量下げなさい！」

変わらず叫ぶ少年の後頭部を、後から入って来た少女が思いっきりはたく。

「いってーな……手加減しろよな」

「この場合はあんたが悪い」

「ひで……」

『……そこの遅刻して来た二人、入学Ｎｏ．と名前は』

「え？あー、えーと……Ｎｏ．１００１、トウヤ・アンサルトです！」

「Ｎｏ．２５７、アニエス」

トウヤと、先刻の少女――アニエスの登場に、ライザは誰にも気づかれないように心の中でニヤリと笑った。

『……そうか。では、遅刻した罰として、君達には一つ試験を与えようか。なに、そんな難しいものではない』

「試験？」

『そうだ。これから、君達には戦ってもらう』

パチン。と指を鳴らすと、その後ろに一台のモニターが突然出現した。ざわめきが一気に会場を包むが、何もない所から現れたことに驚く者は誰一人いなかった。皆が驚いているのはもっと別のこと。

そう、モニターに写っている存在。

一見するとそれは人のよう。

手足があり、胴があり、頭がある。

ただ一点、普通の人間と違う所。

放つオーラ、魔力、雰囲気。その全てがこれの正体を語っている。

『君達が戦うのは、魔王だ』

第三話（前書き）

ショボいながらも初バトル？

第三話

「魔王……だって！？」

これまでに無いほどの動揺とざわめきが会場を支配する。
誰も彼もがモニターの向こうの存在を恐れ、怯えていた。なのに、なぜか視線を外す事ができない。直視は出来ないのだが、気になって完全に視線をそらす事もできなかった。

そんな中、トウヤは魔王をジッと見つめていた。
その目は自分と同じ存在と戦う事に対するためらいの目ではなく、自分の敵がどんな奴か分析するハンターの目。戦う者の目をしている。

「……違うな。あれは、魔王じゃない」

「わかるの？」

ポツリと呟いたトウヤの言葉に、横にいたアニエスが反応する。

「あぁ。限りなく魔王に近いが、魔王じゃない。……持っている力、魔力の波長とかは完全に魔王だが……ただそれだけだな」

「ふーん……？」

「わかりやすく言えば……魔王の力だけをいれた人形だな。あれは」

『その通りだＮｏ．１００１トウヤ・アンサルト。これは本物の魔王ではない』

ライザの言葉にざわめきが収まりを見せる。だが、今度は偽魔王発言にザワザワとし始めた。
ポツリと呟いただけの小さな声を拾われ、トウヤは若干不愉快そうに眉を寄せる。

『本物の魔王では無い分、力は大分劣る。だが油断はするな。偽物だろうが、弱かろうが魔王だ。一般人では集団でも歯が立たない程度の強さはある。
勇者になろうとする君たちは練習用魔王とでも思ってくれればいい。ケガはするが、殺人は出来ないように設定されてる。安心して挑むがいい。
ただまぁ、さっきも言ったがこれは試験だ。一人でこれを倒せないような奴はこの学校にはいらない』

「ふーん……って事はさトウヤ。あたしであの魔王は倒せるって事？」

「あー……いけるだろうな。一応魔王だし」

「そう。じゃぁ、行くわよ」

「えー……俺一般人なのにー」

「あれ倒さないと学校に入れないみたいよ？」

「やります。全力でやります」

変わり身の早さに、アニエスは思わず口元を綻ばせるが、それを自覚した途端表情を引き締める。

二人は未だにざわめく会場をジロジロと見られながらも、ライザの方へと歩いて行く。敵意などは感じられないが、好意的な視線でも無いのは確かだ。
トウヤは視線に居心地の悪さを感じるが、アニエスは何事も無い様に堂々と突き進んでいった。

「やめるなら今のうちだ。どうする？」

「ふん。相手は偽物でも魔王なんでしょ？ならあたしの敵じゃないわ」

「自信がある様で何よりだ。それでこそ、勇者を目指すものだ」

「あのー……やっぱり俺も戦わなきゃならないんですかね？」

「「当然」」

「ハモった！？い、いや……俺一般人なんですが……」

「「それは無い」」

「またハモるの！？あんたら一体何なの！？」

「「一般人ですが何か？」」

「絶対にちげえええええええええええええええええええええええええええええ！！！！」

会場にトウヤの悲痛な叫びが響き渡った。

「今からお前達をこの魔王がいる場所へと送る。異空間へと続いてるから、そこでは好きなだけ暴れていい。被害とかを気にする必要はない」

「そう。それはいい事ね」

「あのー……俺は――」

「戦いはそこのモニターでリアルタイムで流れるが気にするな。それじゃ、行くぞ」

「ちょ、人の話聞いて――」

「『空間転移』」

「いや――だか――――」

モニターが突然現れた時のように、二人は一瞬でその姿を消した。約一名、騒いでる者がいたが問答無用で異空間へと送られる。

残ったライザは視線をモニターへと向ける。画面は中央から縦に分割され、トウヤとアニエス、偽魔王がそれぞれ写っていた。

「……やはり気になるかの？」

後ろからジージジに声をかけられても視線をそらす事は無い。

「勿論です。１０００人しかいないはずなのに１００１人目だった

り、魔王が偽物だと即座に見破る。彼は一体何者でしょうか」
「上限１０００人は学園長であるワシにも変えられん。変えられるのはただ一人。……彼は、神のお気に入りなのかもしれんの」
「それは……」
「例えばの話じゃよ。フォッフォッフォ」
「……ほんと、喰えないジジイだ」

☆アニエス☆

空間転移と共に真っ白に染まっていた視界が、時が経つと共に鮮明になっていく。
そこは真っ白な世界。さっきまで白で視界を遮られていて全然区別がつかないけど、ただ一つだけ違う所があった。
――偽魔王。
少し離れた位置で何もせず、棒立ちしている。その顔は仮面のような物をつけているため、どんな表情をしてるかはわからなかった。
どうやら、律儀にもあたしが完全に転移するまで待っていてくれ

てるようね。
その配慮はありがたいけど、生憎それで手加減をかけるような人間では無い。

「『閃光(テラ)！』」

さっきの下衆な男達に対して使った時よりも込めた魔力の量は圧倒的に多い。
けど、こんな攻撃で倒せるなんて微塵も思っちゃいない。
本気の攻撃では無い。かと言って威嚇や挑発の類でも無い。
この攻撃の結果次第で、あたしの勝敗が決まる重要な一撃になる。
けど、偽魔王は何の反応も示さなかった。
決定打になるような攻撃ではない。けれど、無傷でいられるほど弱くも無い。偽物だが魔王と言えども無視は出来ない。

そんな一撃を、何の抵抗もせずに真正面から受けたのだ。

「ちょぉ――――！？」

一応敵なのに、つい偽魔王の心配をしてしまった。その姿は直撃の際に舞い散った『閃光(テラ)』の残滓に阻まれて見えない。それが一層ハラハラさせてくれる。まぁ、攻撃したのはあたしだけどさ……。

そんな風に、気を抜いてたからかもしれない。気づく事が出来なかった。

偽魔王が背後に回り込んでいた事に。

「ピギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

「きゃっ――――！？」

突然の奇声に体がビクリと跳ね上がってしまった。そのせいで反応が遅れ、偽魔王があたしの首を掴み、地に押し倒す。そしてもう片手で両手を押さえつけてくる。

あたしはうつ伏せになってしまい、首を抑えられてるためマトモに動くことが出来なくなってしまった。

……くっ！一生の不覚！

油断してこの体勢。それにさっきの「きゃっ――――！？」とか……もうやばい、恥ずかしくて死にそう。

モニターされてるとか言ってたから今のがさっきの会場に……どうしよう、顔が熱い。熱すぎてなぜか涙が出てきた。

『どうした、もう終わりか？』

一瞬、偽魔王が喋ったのかと思ったが、思い返してみればさっきの男の教師（だよね？）の声のような気がする。

偽魔王を介して話しかけてきたのだろう。口振りからして偽魔王

は作ったらしいから、スピーカー代わりにする事も出来るのかもしれない。

「終わり……？冗談じゃないわ。まだ始まってすらないもの」

頭を何とか横に動かし、横目で偽魔王を睨みつける。

正直、怖かった。魔王の魔力、その纏う雰囲気。常人ならばこれだけで気を失ってしまうかもしれない。

けど、その体には小さいながらも傷が点々とつけられていた。

よし、これなら行ける！

そう確信したあたしは、ばれない様に魔力を集中させて行く。

「あたしは……あたしは勇者なんだから！『大地の報復（ロック・シュプリッター）』」

「ピギャ――！？」

あたしの魔法が発動すると同時に、偽魔王は一瞬でその場を離れた。

なぜなら、地面（なのかな？）から太さが３０センチもある大量の棘があたしを貫いて襲ったからだ。

偽魔王から見れば今のあたしは自分の魔法で死んだマヌケに見えるはず。けど――

「よいしょっと」

「ピ――！」

何事もなかったかの様に立ち上がる。いや、実際に何もなかった。

仮面のせいで表情はわからないが、流石の偽魔王も驚いたような反応をしている。

「正直、ビビったわ。油断してたとはいえ、背後を取られて組み伏せられて。流石魔王、怖いわね。

でも――――あいつほどじゃ無いわね」

「ピ？」

言葉の意味を図りかねてるのだろう。首をかしげて頭に？マークをつけている。うん、別に可愛くない。

ってか、さっきから「ピ」としか言ってないじゃないの。何なの、どこの小鳥なの。ピーちゃんとでも呼ばれたいの？気持ち悪い……。

「ピギャアアアアアアアアアア！！！」

あたしの心を読んだのか、激怒したように叫ぶ偽魔王に一瞬怯んでしまう。

その隙をついて偽魔王はこちらへ接近してくる。

――速い！

さっき後ろへ回り込んだように、あたしよりずっと速い。今もその姿を捉えるのがようやく。

「『閃光（テラ）』」

正面から突っ込んできたため、何とか迎撃する事が出来た。

だが、偽魔王はそれを腕に纏った何かの魔法で、容易くかき消してしまう。――チッ！

懐に入り込んだ偽魔王はそのまま横一線、あたしの胴を切り裂く様に腕を振るう。それを後ろに一歩下がる事で間一髪避ける。
偽魔王は肘を曲げ腕を背に回すと、槍のように突き出してきた。体を捻り再度避けると自然と偽魔王の後ろに回り込む形となり、突いた体勢のまま隙だらけな偽魔王の後頭部に蹴りを一発お見舞いする。その衝撃で、地面に頭から突っ込んで行った。

「『閃光（テラ）』」

そんな状態を見逃すほどあたしはお人好しじゃない。
その隙だらけな背に魔力を限界まで込めた一撃を放つ。

偽魔王は慌てて体を反転、こちら側を向くと先ほどの魔法で光の球体を切り裂こうとする。
だが――

「引っかかったわね」

あたしは今、物凄いニヤニヤしてると思う。
今の魔法は『閃光（テラ）』ではない。見た目は全く一緒だが、その効果は全く違う。

偽魔王はそれに気付いた様子もなく、自分の身を守るために光を切り裂こうと腕を振るい――――盛大に爆発した。

「『天使の木馬（リヒト・ボム）』」

見た目は『閃光（テラ）』と全く同じ。だが、威力も範囲も桁違いに高い広域殲滅用の爆破魔法。本来は戦争などで使われるような魔法である。これなら、偽魔王相手に大ダメージ……いや、勝てると確信できた。

でも、そんなに離れていないこの位置なら、爆発の範囲にここも入っている。

爆発の余波はすぐにあたしにまで迫ってきて、飲み込んでいった。

気づけば、あたしはさっきの会場にいた。

会場を歓声と拍手が包み込みこんでおり、それがあたしに対する賞賛だと気付くのに少し時間がかかった。

「え……えっと……」

「おめでとう。無事に勝てたようで何よりだ。自信は偽りではなかったようだな」

戸惑っていると、後ろからさっきの男（そう言えば名前を知らない）が拍手をしながらそんな事をいう。

「ふん、当たり前よ。魔王に勝てなきゃあたしの存在意義が無いもの」

「ふむ……？まぁ、いいだろう。そんな事より、君も見るがいいさ」

「ん？何を？」

男は何も言わず、視線をあたしからそらしてどこかを見ている。
その視線の先を見ると、そこにはモニターが。
縦に半分に分割されたモニターは片方は真っ黒で何も映っていなかった。

「なっ――！？」

もう片方のモニターを見た瞬間、あたしは言葉を失った。

あいつが――トウヤが――――血みどろで倒れていたから。

「嘘……何であいつが……」

無意識に、そんな言葉が口に出ていた。

「彼が心配か？」

「……別に、そういうわけじゃ……」

心配とか、そういうんじゃない。絶対、絶対に違うんだから！
あたしは知っている。あいつの強さを。あいつの正体を。
偽物なんかに負けるようなやつじゃないって、あたしは知っている。

そう、知っているんだ。
あいつの力を。
魔王の力を。

いや、本当は知らされたのかもしれない。あの時に――

第三話（後書き）

次回、回想へ。

第四話（前書き）

アニエス視点の回想編、スタート！

第四話

≪

「あんた――――魔王でしょ？」

そう告げた時、気持ちが高ぶっていた。

あたしは勇者になりたかった。

いや、勇者にならなくてはいけなかった。

平和を害する者。人の敵となる者。勇者の対となる存在、魔王。

目の前にいるのがそれだと気づき、倒せば真の勇者となれる。

そんな感情が先走っていた。

「――――」

眼前を闇が覆い尽くす。

突然の出来事に反応が遅れ、それが魔王の仕業だと気づいた時には、既に取り込まれた後だった。

見れば、魔王はさっきまで感じていた少し頼りない雰囲気は消え失せ、完全に魔王となっていた。目付きは鋭くこちらを射抜き、禍々しい魔力が体中を駆け巡っている。むき出しの敵意が嫌というほど伝わってくる。

「へぇー……空間を隔離するなんて。随分とヤル気満々ね」
「殺る気なんてねえよ。お前の返答次第ではな」
「あら、偉そうに」
この時、魔王と戦っても勝てると思っていた。
過去に一度、あたしはあたしの世界の魔王を倒している。
今はその時よりもずっと強い。負ける要素は一切ない。
だから不遜な態度は絶対に崩さない。
「一つ答えろ」
「あんたの死に様でも聞きたいのかしら？」
「何で俺が魔王だってわかった」
「そんなの聞いてどうするの？あんたはここであたしに倒されて終わりなんだから」
「終わらねえよ。俺がお前程度に負けるわけねえだろうが」
「……へぇ」
カチン、とどこかで音が鳴った気がした。
あたしに言わせてみれば、「あんた程度に負けるわけがない」だ。
勝つのはあたし。負けるのは魔王。
コイツ、凄くイライラする。

「なら、試してあげようか？どっちが強いのか」

「試すまでもない」

「あぁ……そう！」

ムカついた。もうこいつムカついた！

魔力を一気に集中させ、形として練り上げる。

３０センチほどの光の球体が出来上がる。ただ、今度は一個じゃない。全部で８個、あたしの周囲をプカプカと浮かんでいる。

それに対し、魔王はその手に剣を１振り作り上げただけだった。

見た感じ、特に珍しさの無いどこにでもありそうな普通の剣。

魔王と言っても、この程度か。

多少の落胆を感じながらも、あたしは攻撃しようと８個の光の球体を一気に膨張させる。数倍に膨れ上がり、人一人を飲み込めるほどまでに大きくなった。

「さようなら。『閃光（テラ）』」

光が一斉に魔王の元へと群がる様に襲う。

これで終わりか……。いろんな世界で恐れられてる存在である魔王。それがたったの一撃で終わりなんて、逆に寂しいかも。

何て思っていたら……。

「どっせーい！」

魔王が光の球体を剣で打ち返して来た。
それはもう綺麗に。あたしの世界で流行ってた野球とかいうスポーツのように、カーンと打ち返して来た。

「え……えええええ！？」

何で？剣でどうやって打ち返すの！？
普通、剣が負けてドカーンか、球体を切り裂くかだよね！？

魔王は振り切った体勢から切り返し、今度は左右反対の体勢で打ち返して来た。
それを高速で何度も繰り返し、８つ全てを打ち返す。

さて、魔王は今あたしの魔法を全て打ち返して来た。
いったい、どこへ向かっているか。それは当然、あまりの出来事に呆然としてるあたしの方であり……。

「ええ！？そんなの有りー！？」

どうにかする間もなく、あたしはあたしの魔法に襲われた。

「安心しろ……峰打ちだ」

「その剣、両刃でしょ！峰ないじゃん！？てか、峰打ちだからって打ち返せないでしょ！？」

「おぉ？生きてたのか」

「……あたしの魔法で死ぬわけないでしょ」

「ふむ……なるほどな」

体に傷はない。けど、魔法の衝撃で舞ったホコリが服や髪について気分は最悪だった。

……何なのこの魔王は。戦意をガリガリと削られている気がする。

はぁ、と深いため息が勝手に出てきた。

「さて、と。時間もないし、そろそろ本気でやるか」

「へ？何を――」

突然、ゴォ！と強い風が襲ってきた。湿っぽい、不吉な出来事が起きる前の様な、そんなヤな風。

……いや、違う。

これは風じゃない。もっと嫌なものだ。

この感じ、この雰囲気。ついさっき感じたものとすごくよく似てる。

そう、さっき感じた魔王の魔力と雰囲気に。

ただ、さっきよりもずっと強い。あたしでも勝てると思える程度から、身動き一つ出来ないほど圧迫感が強くなっている。

それが、こちらへと歩いてくる。

「ぁ……ぁ……」

思い知らされた。

これが本当の力。
これが本当の恐怖。
これが本当の魔王。

あたしじゃ絶対に――いや、人が勝てるような相手なの？

生まれて初めて、魔王と言うものを感じた。今なら、世界中の人が魔王を恐れていた理由がよくわかる。
そばにいるだけで命を狩られるような相手。絶対的強者。
今すぐ逃げ出したい。でも、逃げようにも体が動いてくれない。
叫び狂いそう。でも、言葉が何も出てこない。
死にたくない。でも、自分が死ぬ光景が頭の中で何度も何度も繰り返される。

「……もう一度聞く。なぜ、俺が魔王だとわかった？」

「ぁ……ぁ……」

「……フン。口も利けんか」

忌々しそうに呟くと、魔王は魔力の放出を抑える。
するとさっきまでの圧迫感は霧のように消え、全身から一気に力が抜けてダラリと崩れ落ちる。ダムが決壊したかのように汗がダラダラと流れて行く。呼吸が乱れ、肺が物凄い勢いで酸素を吸収していった。

「話せ」

近くまでくると、持っていた剣をあたしの首へと突きつけてくる。
力を振り絞ってなんとか顔をあげる。そこにいた魔王は、冷たい

目をしていた。なんの感情もない、命を奪う事にためらいが無い……いや、慣れている目。

「ぁ……ぁぅ……あ、あたしは……誓約……魔王、以外に……魔法……が当たら……ない……代わり……に……力の……強化、を……して……」

「……そういう事か。魔王以外は魔法を使ってもダメージを受けない。さっき俺がお前の魔法を打ち返したのに無傷だったのはそれが理由か。

それなのに、俺はお前の魔法で怪我をした。すごい小さな傷だが、怪我をする事自体がないから俺が魔王だと思ったのか」

喋るのもやっとな途切れ途切れの言葉だったが、すぐに理解してくれてだいぶ楽になった。

小さくコクンと頷くと、何やら思案顔になる。「ふんふん」とか「うんうん」とか言いながら頷いている。

「んー……まず勘違いをしてるぞ、お前は。俺は魔王じゃない」

「ぇ……で、でも……」

「いや、確かに魔王なんだが……正確に言っちゃうと、元魔王だ」

「もと……魔王？」

「あぁ。訳あって今は正式な魔王じゃない。むしろ逆で、俺はこれからアルカリス学園で勇者になるんだ」

「勇者に……！？」

打ち返された時よりも、本当の力を思い知らされた時よりもずっと驚いた。
勇者と魔王は相反する存在。宿命（ライバル）の敵と呼べるような相手だ。
その魔王が――勇者に――。

「だからまぁ、お前が一つ約束できるなら殺さない。そんだけの力、魔王を倒すためだけの誓約。お前もアルカリス学園で勇者に、ってクチだろ？これから仲間になるんだから、仲良く行こうぜ」

「何、で……魔王が……」

「だから元だって。
それで、どうするんだ？俺の話を聞く気はあるか？お前にも得な話だと思うんだかな」

「何が……得によ……」

「俺が魔王だって誰にも教えない。これが守れるか？守れないか？
守ればお前は死なないで済む。更に、お前の誓約は人や魔物に対して無力だ。俺が色々とサポートしてやれるぞ？
守れなければ……残念だが、な」

わざとらしく、剣をあたしに少し近づける。
普段なら特に何も思わないそれが、今は物凄く怖くて仕方ない。
自分を殺せる存在というものが、怖くて仕方なかった。
まだ死にたくない――生きていたい――だから、

「ま、守り……ます……絶対に……！」

「……そうか、ありがとう」

すると魔王は剣を消し、手をあたしの頭にかざす。何をする気かわからないが、今はそれだけでも怖く、体がビクビクしてしまう。

手に魔力が集中していくのがわかり、一瞬、光り輝いた。

思わず目を瞑ったが、時が経つにつれだんだん違和感に気づき始めた。

体のだるさが無くなっていた。

「これは……」

呼吸も普通にできて、体にちゃんと力も入る。全て万全の状態に元通りになっていた。

「言ったろ？サポートするって。

済まなかったな、少し脅しが過ぎた」

「あれが少し？」

「ハッハッハ！よっぽど怖かったんだな！」

「うぐ……うるさいわね」

言われるとカチンと来るが、事実なので何も言い返せなかった。

コイツは何なんだろうか。そう思って見上げると、楽しそうに笑っていた。どこにでもいる、普通の人間のように。

さっきまであんな怖かったのに、今は全く怖くない。むしろ、弱そうである。

とても、同一人物には思えない。

「ははは……。そういや、名前は？聞いてなかったな」

「名前を聞く前に、まずは自分から名乗るのが礼儀じゃない？」

だからか、さっきの今でこんな事まで言える。短気なイメージのあった魔王だが、不思議とこの魔王がこの位では怒ったりする気がしなかった。

「ぁー、それもそうだな。悪かった。
俺の名前はトウヤ。トウヤ・アンサルトだ」

「……アニエスよ」

「これからよろしく、アニエス」

魔王は――トウヤは片手を差し出してくる。一瞬攻撃か何かかと思ったけど、それが握手を求めているのだと、気付くのに数秒を要した。

魔王は怖い。それは嫌と言うほど思い知らされた。
けど――

「……よろしく、トウヤ」

けど――トウヤは怖くない。

あたしがその手を取るには、それだけで十分だった。

≫

そんなトウヤが、倒れていた。
あたしよりずっと強いのに、一見弱そうだけど凄い力を持っているやつなのに。
血にまみれ、ピクリとも動く気配がなかった。

「どうして……勝ってみせなさいよ。そんな偽魔王、あんたの敵じゃないでしょ」

果たして、あたしの声が届いてるのだろうか。おそらく、あちらからは届いてるが、こちらからは届かない仕組みになっているはず。
それでも、口に出していた。

「トウヤ！！！」

――――ピクッ

倒れているトウヤの指先が微かに動いた。
声は届いてない。けど、気合が届いた。そうだ。きっと、そうだ！
トウヤはそのまま生き返ったように全身を動かし、今起きたかのように体を起こした。

『ぁー……』

モニターの向こうからトウヤの声が聞こえた。
良かった……まだ生きてた……。
ホッと胸をなでおろしたあたしだったが、次の瞬間その気持ちが一気に殺意へと変わった。

『ふわーぁ……よく寝たー……うお！？何で俺こんな血だらけなんだ！？』

「……よく、寝た？もしかして……寝てただけ？
ハハッ……ハハハハッ……あいつ、殺す！今すぐ殺す！そこの教師！今すぐあたしをトウヤのとこに送りなさい！」

「い、いや、試験中なんだが」

「大丈夫よ。これも試験だから。結果は、あいつの死だから」
ニッコリと笑うと、名前のわからない男の教師は引き攣った笑みを浮かべた。その頬を汗が伝う。

「……とりあえず、この試験が終わってからでいいですか……」

「わかったわ。

……フフフフッ……フフ、フフフフフフフッ！」

あたしはこの後の出来事を思うと、楽しみで笑うのを抑えられなかった。

第四話（後書き）

知らないうちに死亡フラグを立てたトウヤ君でした。

第五話（前書き）

ＰＶ５０００、ユニーク１０００、お気に入り登録者５０人突破！
皆様、ありがとうございます！

第五話

「何じゃこりゃあああ！」

絶叫した。

トウヤは自分の体についた血を見て、全身を震わせながら叫んだ。

「ギヒャヒャヒャヒャ！」

「うぉー……俺か？俺の血なのか？」

「ギヒャヒャヒャヒャ」

「どこから……背中バッサリやられてる！？どうりで寒気がするわけだ」

「ギヒャヒャヒャヒャ……」

「やばいな、この出血量。俺死ぬんじゃね？何か頭クラクラするし……えーと、確かこういう時は……」

「ギヒャ……クスン」

「『奇跡の救済（ヴンダー・ヒルフェ）』。……おぉ。傷がみるみるうちに塞がって……もう治った！？流石あのババアの魔法だ」

「クスンクスン……」

「ん？」

涙ぐんだ声にようやく気付くトウヤだった。
声のした方を見ると、そこには――虚空があるだけで、何もなかった。

「気のせいか」

「キノセイ　ジャナイイイイ！！！」

「うお！？」

何もない所から聞こえた声に、思わず飛び上がるトウヤだった。
ポカンと情けない表情をしながら声の方向を見ていると、雲の隙間から出てくる太陽のように、何かが徐々に姿を現しはじめた。

それは一見、人の形をしている。
だが、肌が黒っぽい赤色をしており、その顔には仮面がつけられていた。身長も3メートルぐらいあり、筋肉隆々で体に小さな山脈がデコボコとできている。
見た目明らかに人間ではないそれは、雰囲気や魔力と共に魔王だと自己主張していた。

「出たな偽魔王……って、何で泣いてるんだ？」

そんなやつが、仮面の目の穴から滝のように涙を流していた。かなりシュールな光景なのは言うまでもない。

「オマエ　ワルイ！ムシ　イジメ　ヨクナイ！」

「……うーん？」

思い返してみるが、何の事か見当もつかないトウヤだった。
その様子を見て、更に偽魔王の流れる涙に勢いが増した。魔王の威厳も何もない。

「……あぁ！思い出した！」

「オモイ　ダシタカ！」

閃いた！と言うようにポンと手をつくトウヤを見て、一気に涙が止まり目が輝きはじめた。

「あぁ！俺の背中の傷つけたのお前だろ！姿消して後ろからバッサリやりやがって！目が覚めるのが後少し遅かったら、俺死んでたんだからな？
……放課後ちょっと校舎裏こいや？」

「ヒイ！？ゴメンナサイ　ゴメンナサイ　ゴメンナサイ！」

「……お前本当に……いや、偽物だけどさ魔王なのか……？」

「……マオウ　デス。ハイ。ソウダ、オレ　マオウ……オマエヨリツヨイ！オマエ　ヨワイ！コワクナイ！」

「へ？」

「タオス！イジメルヤツ　タオス！イジメ　ナクス！オマエ　タオス！」

偽魔王は体内に魔力を流し、身体能力を一気に上げる。常人より

もずっと早い速度で、一気にトウヤへと迫る。

「ちょー！？急展開すぎて誰もついていけないって！？」

間を詰め、肉薄すると拳に１０センチほどの黒い球形を纏い、上から一気に振り下ろした。

「チッ！」

それを紙一重で避けると、行き場を無くした拳は地面へと突き刺さった。トウヤは攻撃後で隙だらけな偽魔王に、仕返しと言わんばかりに殴り返そうとして、一瞬で後方へと下がった。

その直後、トウヤのいた場所をブラックホールのような黒い球形がトウヤを飲み込めるほど膨らみ、縮小して消えていった。

「……ちょい待て。今の直撃してたら間違い無く死んでたよな……？」

『当然だ。トウヤ・アンサルト、お前の相手してる魔王は特別製だ。殺人可能設定になってる』

「おまっ！何してくれてんだよ！？俺を殺す気か！？」

『ッ――――――』

「あいつ会話きりやがったあああああ！？」

ライザの通告に、声を荒げる他ないトウヤであった。

「ヨケルナ！イジメルヤツ　キエロ！」

「いやいや、俺一般人だし。魔王なんか虐められないし。てか、俺の状況が虐めだし！」

「ウルサイ！オコッタ！オマエ　コロス！ゼッタイ　コロス！」

「まずは落ち着いて話し合いでも……うお！？」

トウヤのすぐ横を、先程の黒い球形が襲う。一瞬、膨張したと思ったらすぐに縮んで消える。

「コロス　コロス　コロス！」

「いや、だからあのね。俺には戦いの意思なんて全く無くてね？できれば戦わずに済めばそれに越した事はないと思うんだが。戦いはめんどくさ……じゃなくて、ダルイ……でもなくて、醜いものなんだ。戦う事がじゃない、戦っている人達の心がどんどん醜くなっていく。どんなに清らかな人でも、戦いに身を投じれば身も心も汚れていく。俺はお前にそうなってほしくないんだ。それにだな――」

偽魔王の足元から黒い影のようなものが、円形を保ちながら広がっていった。一人でペチャクチャ話してるトウヤの足下を過ぎ、どこまで続いているかわからない白い世界を黒で侵食していく。地平線の果てまで広がると、そこから黒い手が生えてきた。普通の人間の手ぐらいの大きさだが、関節はないようでグニャグニャしていて、長さに制限もないようである。数千、いや数万という数の手が影から生えて来たため、もはやホラー状態になっていた。

それらが一斉に、喋っていたトウヤを襲う。

「――だから俺はそこで言ったんだ。「やめろ！その汚い手で彼女

に触るな！」って。そしたらあいつら一気に俺の方に――――うおおお！？」

足下から生えてきた手に足を掴まれ、ようやく現実へと戻ってきた。黒で埋め尽くされた視界から逃げ出そうとするが、足を掴まれているため動く事すら叶わない。いや、仮に動けたとしても３６０度隙間なく迫って来る手から逃げる術はない。

黒い手がトウヤの手を、胴を、頭を、体全体を掴んでいく。ガッチリ掴まれ、身動き一つ取れなくなってしまった。

手が次々とトウヤを覆っていく。黒で覆われ、姿が見えなくなっても尚、黒い手達は蛇の様に蠢きながらトウヤの周りを囲んでいく。

「……ヤッタ。イジメルヤツ　オレ　カッタ！コワイノ　イナイ！ギヒャヒャヒャヒャ！」

まるで獣のように勝利の咆哮を轟かす偽魔王。

だが、

「『風精霊の加護（レーレ・シュッツ）』」

黒い手達が一瞬にして飛び散った。

トウヤの周りを風のうねりが膜のように覆う。そこに黒い手が触れると、まるで野菜をすり潰してるかのように削れて消え去った。

「この手の魔法。数も多いし長さに制限もない。地味にパワーもあるし厄介な魔法だな。だが、所詮は手だ。殴る、握り潰すぐらいし

か攻撃方法がない。要は、攻撃性に欠ける。
だから俺みたいな一般人でもこうして無事にいられるわけだ」

「ウググ……！コロス！カナラズ　コロス！」

偽魔王の手から小さな黒い球体がトウヤ目掛けて放たれる。それは先程の拳に纏っていたのと同じ魔法。

「そんなの、当たる前に落とせばいい！」

トウヤは纏っていた風の一部を球体へと向け、風と球体がぶつかると先程と同じように一気に膨張する。そのまま風が飲み込まれ、消え去る――――事はなかった。

「お……おおお！？」

トウヤの周りの風までをも吸い込み始め、綱引きよろしくトウヤまでをも吸い込もうと引っ張り始めた。
必死に抵抗するが、吸い込む力の方が強く、徐々に球体へと近づいていく。

「何で消えずに風までも……！」

珍しく、トウヤの声に焦りが混じる。
足に力をいれて踏ん張るが、トウヤは戦う前に大量の血を失っている。傷は治せても血は戻らない。戦えないほどでは無いのだが、体にいまいち力が入らなかった。このまま飲み込まれるのはもはや時間の問題。

「くっそ……！いったいどうすりゃ……って、あれ？引っ

張られてるのって風だよな？それなら……」

トウヤは即座に魔力の放出を抑えた。魔力の源を失った風は、かき消えるようにその姿を消した。

すると、それまで散々風を吸い込んでいた黒い球体は縮小し、消えていった。

「……何でこんな簡単な事に気付かなかったんだ……」

引っ張られるなら引っ張るものを無くせばいい。

そんな小さな子供でもわかるようなことに気付かなかったショックか、トウヤはその場に大袈裟に肩を落とした。

対する偽魔王は子供のように地団駄を踏んで悔しがっていた。そのうちハンカチを噛んで「キーッ！」とか言いそうである。

「ヨケルナ！アタレバ　オレノカチ！」

「お前が勝ちたいように、俺も負けたくないんだよ」

「オレ　マケナイ！オレ　カツ！」

偽魔王の体から一気に魔力が溢れ出した。それは今までとは違う、思わずトウヤも顔をしかめる程の強大な魔力。

地面に広がっていた影が一気に縮み始めた。今まで薄く広く魔力が行き渡っていた影が、濃く狭く、魔力の流れを変える。

直径１０メートルほどまで縮むと、そこから新たな手が一本現れた。

これまでとの質より量とは違う、量より質の手。腕の太さが８メ

ートルぐらいあり、握られた拳は１０メートルを優に越す。
それを見た途端、トウヤの表情が引き攣った。
「おいおい……こんなのに殴られたら城だって吹き飛ぶぞ？」
いくらトウヤが強大な力を持っていようが、その身は普通の人間と大差ない。圧倒的な質量の前ではアッサリと潰れてしまう。
「シネーーーー！！！」
巨大な拳がトウヤへと迫る。
その見た目と違い、小さかった時よりもずっと早い一撃。
「『岩壁（フェルゼン）』！」
拳の前に巨大な岩の壁が立ちはだかる。大きさは共に同じぐらいで、一瞬巨大な魔物同士が戦ってるようにも見える。
「ソンナノ　ムダ！」
だが、岩は拳に触れた瞬間、粉々に砕け飛び散った。
トウヤは一度舌打ちをすると、高く飛び上がりそのまま宙で停止した。まるで、そこに見えない床があるかのように。
だが、関節も無い、長さに制限も無い手は急上昇し、トウヤへと迫る。
「なら、これならどうだ。『悪魔神の怒り（メッエライ・ブファイル）』！」
トウヤの後ろに大きな魔方陣が現れた。そこから黒い矢が次々と出てきて、再度トウヤの方へと向かってきた黒い手に当たり、爆ぜ

た。
一瞬、動きを止めた手は爆発によって形を変えるが、すぐに再生してしまう。けど、矢は一本ではない。また別の矢が被弾し爆破。再生したところにまた別の矢が。
それが何十、何百、何千、もしくは何万か。ずっと繰り返しているうちに段々と矢の爆発が手の再生速度を上回り始めた。

「どうやら、俺の勝ちのようだな」

「ウルサイ！オマエ　コロス！」

「俺に勝てないやつが言うな」

「ウルサイ！オレ　マオウ　ダカラ　コロス！マオウ　コワイ。マオウ　ザンギャク。マオウ　タクサン　ヒトコロス！」

――――ピキッ！

何かが割れる音が周囲に響いた。
偽魔王が「ナンダ？」とキョロキョロと見渡すが、割れているものは何もなかった。いや、そもそもここは何もない空間だ。割れるようなもの自体、存在しない。
気のせいだと判断し、トウヤの方を向いた偽魔王は大きく目を見開いた。

「お前……今なんて言った？」

いつの間にか、手を伸ばせば届くような距離にトウヤがいたためだ。さっきまで宙に立っていたように、今も身長差のある偽魔王と同じ目線で宙に立っている。

「オマエ　ナンデココニ――――――！？」

「黙れ」

偽魔王の顔を鷲掴みにする。偽魔王は慌てて手を動かし、後ろからトウヤを襲う。

だが、

「『魔法線上の侵略者（ツオバー・フェアツオバーン）』」

その動きがピタリと止まった。

「！？」

「何驚いてるんだ？」

驚愕に目を見開く偽魔王に、トウヤの低く冷たい声が、それだけで一種の攻撃となって襲う。

「『魔法線上の侵略者（ツオバー・フェアツオバーン）』は魔法に魔法をかける魔法だ。相手の魔法のコントロール権を断ち、使い手がいなくなった魔法を新しく自分

がコントロールする。これだけ聞くと強そうだが、この魔法は相手が魔法に込めた魔力の倍の魔力が必要になる。使い勝手は悪い
けど、これでわかったろ？お前如きじゃ、俺には勝てないって」

「オマエ――」

「誰が喋っていいと言った」

「ガアアアアアアアアア！！！？」

トウヤは偽魔王の頭を掴む手に力を込める。ミシミシと嫌な音と共に、偽魔王の叫びが響き渡る。
それを見ても表情を一切変えず、偽魔王の身体が壊れない程度に魔法を直接流し込む。

「あああぁぁぁあぁあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「苦しいか？苦しいだろ？それがお前が人にしようとした事だ。
お前は魔王を何だと思ってんだ？魔王は怖くなくちゃいけない。魔王は残虐でいなきゃならない。これはいい。魔王はそうであるべきだと、俺も思う」

だが、と言うと同時に魔法を直接流すのを止め、偽魔王が静かになるの待つ。

「ァ……ァ……」

偽魔王の目は狂いかけていた。焦点が合わず、上下左右眼球が忙しなく動き回っている。トウヤに怯え、魔法を直接流され、口もマトモに動かない。

それを気にする思考も、恐怖を感じる感情も、もう持ち合わせていないのかもしれない。

「魔王だからって罪なき人々をたくさん殺していい理由にはならない。魔王はそういう存在じゃない、魔王は――もう一人の勇者でいなくちゃならないんだ！」

偽魔王をゴミを捨てるように投げると、動きを止めていた手を動かし、偽魔王に襲いかかる。

そして、偽魔王の体を押し潰すために一気に力を込める。

「ギヒャ……ギヒャヒャヒャヒャ！ヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！ギヒャヒャ――ヒャ――――」

何かが折れる音が聞こえる。それが何度か繰り返されると、偽魔王の狂った笑い声は聞こえなくなった。それでも、何かが折れる音は止まず、音楽（レクイエム）を奏でるように鳴り続けていった。

「お前は、魔王を知らなすぎだ」

悲しそうな呟きと共に、トウヤは白い世界に取り込まれていった。

第五話（後書き）

ブチ切れたトウヤ君でした。

第六話（前書き）

遅くなりました。
だいぶ長くなってしまいました……

第六話

気付けば、トウヤはアルカリス学園入学式の会場へと戻っていた。
だが、アニエスの時のような歓声でのお迎えは一切なかった。

静寂。

誰も彼もが黙り込んでいる。ただ静かに、トウヤの事をじーっと見つめている。その目の殆どが敵意に満ちていて、今にもトウヤに襲いかかってもおかしくはない。

別に大っぴらに歓迎しろとは思っていない。だが、こんなにも静かで、あまつさえ敵意を向けられるとは思っていなかった。
困惑しているトウヤに、後ろからライザが声をかける。

「Ｎｏ．１００１トウヤ・アンサルト」

「あ、えーと……この状況はいったい――」

「君を、アルカリス学園不合格とする」

「……は？」

何を言ったのか聞き取れなかった。
「アルカリス学園不合格」その言葉の意味を必死になって考える

が、答えが出てこない。
ポカーンと間抜けな効果音が似合う呆けた表情をしているトウヤを、ライザは鋭い目で睨みつける。
「勇者の資格など無い。今すぐ自分の世界へ帰ることだな」
「え、ちょ、何でだよ……！？」
無情に、冷たく言い放たれて頭が冷静になったのか、言葉の意味を理解する。だが、理解した事によって更なる混乱がトウヤを襲った。
「わかんないの？」
問い詰めるトウヤの言葉に反応したのは、ライザではなくアニエスだった。
助け舟が来たと喜ぶトウヤだったが、その表情はすぐに凍りついた。
アニエスの目は、初めて会った時のもの。魔王を、トウヤを敵と認識している目。トウヤを倒そうとしている目だ。
「魔王は――もう一人の勇者でいなくちゃならないんだ」
「――――――っ！？」
アニエスの言葉に全てを理解した。理解した途端、身体中に寒気が一斉に襲いかかって来た。
それはつい先程、トウヤが偽魔王に対して言った言葉。感情が高ぶり、理性で衝動を抑えられなくなった時に言った言葉。魔王を倒す勇者が言ってはいけない言葉。

「魔王が勇者なら勇者は何？世界の敵？悪的存在？」

「い、いや……そんなつもりじゃ……」

「勇者がそうなら魔王は何？世界の救済者？正義の味方？それに逆らう人間や勇者が悪いの？」

「違う、俺は……」

「……所詮、魔王（あんた）には人間（あたし）達の事なんてわかんないのよ」

「っ！」

アニエスの言葉が深く胸に突き刺さった。それは、拒絶。自分達とは違う存在であるトウヤ。決して仲良くなんてなれない、手を取り合って同じ道を歩む事はできない。その意思が、人間（アニエス）の心の声が魔王（トウヤ）の心の奥底にある何かに、鎖となって雁字搦めに巻きついてくる。

「アニ、エス……」

「気軽に名前呼ばないでくれるかしら。あんたにあたしの名前を口にして欲しくないの」

「で、でも」

「まだわかんないの？」

これまでで一番冷たい、相手を蔑む声。表面上は冷静に取り繕っ

ているが、その内には隠しきれない怒りの炎が燃え盛っている。
トウヤはジッとアニエスを、アニエスの瞳を見つめる。波を立てない静かな青い瞳は、トウヤを捉えて離さない。逸らす事ができない。逸らさなきゃいけないと、わかっていても。その深みにはまって行く。

「あんたはあたしを……今この場にいる全ての人を敵に回したのよ」

あぁ、やっぱり。
アニエスの言葉を聞いて、トウヤが思ったのはただそれだけだった。
悲しみも、怒りもない。あるのは自嘲。自分で自分を攻めなければ、心のバランスが今にも崩れ落ちそうなほど不安定になっていた。

「俺はここにも居場所はないのか……勇者にも――――――にもなれないのか……」

トウヤの呟きはどこかに行き着く事もなく、幻想のように霧散して消えていった。

今のトウヤは、呟きのように消え去ってしまいそうだった。偽魔王と戦った時の様子は微塵も感じられない。中身を入れ替えた機械のように項垂れていた。
実に痛々しい姿だが、それを可哀想だと思う人はいなかった。
ただ一人を除いて――

「それは違います！」

会場全体に響き渡るほどの大声に、トウヤ以外の皆が一斉にそちらを向く。
声の主は皆が一斉に自分を見た事に「ひうっ！？」とか言って驚いていた。恐る恐る、皆の注目を一身に浴びてるのに誰にも見つからないように、と言った感じで前へと出てくるとトウヤとアニエスの間に立つ。

現れたのは一人の少女。
腰にまで届く長いフワフワとしたピンク寄りの赤い髪、おっとりと目尻の下がった赤い瞳、アニエスが綺麗な少女ならばこの少女は可愛い少女だろう。何だか守りたくなってしまう、小動物のような雰囲気が漂っている。

「……あんたは？」

「はい！シェリです！」

アニエスに冷たい視線を向けられるが、シェリはそれに気付いていないのか、気付いていてやっているのか、その顔には笑顔が浮かんでいた。
その様子を見て、アニエスの表情がムッとなる。

「いったい何が違うのかしら？」

「アニエスさんはさっき、トウヤさんは皆を敵に回したと言いました」

「えぇ、言ったわね。それが？」

「それは違うんです。わたしは敵に回ってません。トウヤさんの味方です！」

ゆっくりと、亀のように遅くだが俯いていたトウヤの頭が上がって行く。

「そもそも、魔王さんは敵ですか？確かに、悪さをしちゃう魔王さんもいますが、それでもいい魔王さんだっているんです！」

「……へぇ、面白い事を言うわね」

「笑いどころありましたか？」

小さく首を傾げながらキョトンとしてるシェリを見て、何だか頭痛がするアニエスだった。

「魔王は悪よ。存在してはいけないの。人々を苦しめ、その姿を見て高笑いしているのよ？」

「いい魔王さんだっているんです！わたしの世界の魔王さんは、優しくて平和を愛する心優しい魔王さんでした！」

「……あたしの世界の魔王もね、そんな悪い奴じゃなかったわ」

「ですよね！やっぱり、いい魔王さんもいるんです！」

「でもね、魔王は存在するだけで悪なのよ」

ビクンと、トウヤの体が震えた。
上がっていた頭も途中で止まり、小刻みに体を震わす。
ただ幸いと言うべきか、その様子に気付いた人は誰もいなかった。

「あたしの世界の魔王は無闇に人を殺したり、どこかの国に侵略する事もなかった。
でも、魔王討伐軍は毎年のように編成され、魔王の元へと送られてたの。何でかわかる？」

「え？えっと……」

「皆、怖いのよ。何もしなくても、いるだけで魔王が怖い。今は優しくてもいつ豹変して虐殺を繰り返すか、その不安を取り除きたくて兵士達は恐怖で体を震わせながら戦ってるの」

「……で、でもわたしの世界では――」

「魔王にはそんな幻想は通じない。世界を平和にしておいて、油断してる所を一気に攻め滅ぼす気なのかもよ？魔王なんてそういう奴ばっか。あんたの世界の魔王もどうせ――」

「うるさーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーいっ！！！！」

その声がうるさいわ！と皆が思ったが、口に出す余裕のある者はいなかった。

「なっ……あ、あんたね……」

近くにいたアニエスのダメージは特に大きい。慌てて耳を塞いだが、それでもキーンと頭に響きが残っている。シェリを睨みつけるが、その目は大きく見開かれた。

ポロポロと、シェリが大粒の涙を流していたから。

「わたしの世界の……魔王さんをバカにしないでください……とても、優しい方なんです。平和が好きで……命が散る事を良しとしなくて……とても、いい方なんです……だから……だから……」

キッと力強い目付きでアニエスを睨みつける。ポロポロと涙を流してるうえに、元々優しい顔立ちをしているシェリが睨んでも大して怖くはない。だが、確かな意思がそこにはあった。自分を貫く、

強靭な意思が。

「だから――――――ハクトゥーリヤ様をバカにしないでください！！！」

シェリの言葉に一番に反応したのはトウヤだった。体の震えは止まり、頭を上げてシェリの方を見る。何かからトウヤを守るように、前に立ち塞がっていた。

「ハクトゥーリヤって……確か1年ほど前に死んだっていう……」

「ハクトゥーリヤ様を、知ってるんですか？」

「知ってるも何もあんた……ハクトゥーリヤって言えば、原初世界の魔王じゃないのよ！？今ここにいる人で知らない人がいるわけないじゃない！いえ、そもそもあんた原初世界の人なの！？」

「え、あ、はい……そうです」

アニエスの驚きや反応に、逆に落ち着き始めたシェリだった。

「優しすぎる魔王。そのせいで部下の反乱を招いて死亡……確かにそれなら、あんたの言い分も……いや、でも――それなら何であんたはここにいるの？」

ここは勇者を育てる学校。魔王を打ち倒す者が集まる場所だ。シ

ェリのような、魔王を良しと捉える人が来るようなところでは無い。
シェリは答えづらいその質問に戸惑う事もなく、ほんわかとした柔らかな笑みを浮かべる。

「わたしは、いい魔王さんとは話し合いで解決できると思うんです。悪い魔王さんなら、ちょっと乱暴になっちゃうかもしれませんが、それでも最後は仲良くできると思うんです。
人も魔王さんも死なせない。それが、本当の勇者さんだとわたしは思うんです。それが、わたしの目指す勇者さん、ここにいる理由の一つです」

「……そんなの、無理よ。魔王なんて所詮……」

アニエスはシェリを、いやシェリの後ろにいるトウヤをジッと見据える。だが、チラリとトウヤと目が合うと、バツが悪そうに逸らしてしまった。

「……シェリ、だったか」

「ほぇ？」

シェリは最初、誰の声かわからなかった。それが後ろから、トウヤの声だと気付くのに振り返るまで気付かなかった。

「あ、はい！はじめまして、シェリです！」

「……お前は魔王が、ハクトゥーリヤが怖くないのか？」

「怖いです。でも、優しい方なんです」

「もしも……もしもだ。今目の前にいる俺が……魔王だったとしたらどうする？」

質問に一番に反応したのはシェリではなく、アニエスだった。ハッとして振り向き、トウヤの事を心配そうな眼差しで見つめていた。

そのトウヤの心臓は早鐘をうっていた。変に手汗をかき、やたらと緊張している。「もしかしたら」という期待と、「やっぱり」という裏切り。その狭間の不安に、押しつぶされそうになる。

そんな二人の様子に気付いた気配のないシェリは、んー、と少し考えると眩しいぐらいの笑顔を見せる。

「トウヤさんならいい魔王さんに決まってます。だって、偽物の魔王さんの言葉に、あれだけ怒っていたんですから！そんな優しいトウヤさんが魔王さんなら、仲良くできるはずです！」

「……そっか」

「はい！」

シェリの満面の笑顔に釣られるように、トウヤもやんわりと微笑む。

「よし、決めた！俺はこの学校に入学する！」

トウヤの一言に、会場が一気に「は？何言ってんのこいつ？」という空気になった。

それも当然。トウヤはさっきまで入学拒否されて沈んでいたから。
だが、今のトウヤの顔には、面白いものを見つけた時のような嬉々とした表情が浮かんでいた。

「聞いてんだろ、ババア！そういう事でよろしくな！」

『誰がババアですか。殺しますよ？』

突如会場に響き渡る女の声。上から響いてきたが、そこには当然人の姿など無い。トウヤはババアと言ったが、年寄りのものではなく、ずっと若い声をしている。ただ、その声にはいまいち抑揚がなく、感情というものをあまり感じる事ができなかった。

「まさか……！？」

皆が頭に疑問符を浮かべているが、ジージだけが驚きを隠しきれない表情をしている。

「アルカリス様……！」

「アルカリス様！？学園長、まさかこの声の主が！？」

「まさか、そんな……幻聴じゃ、なくて……？」

「アルカリス様……全ての世界を束ねる――――神様……」

アルカリスという単語に、誰も彼もが声を上げて驚いていた。ライザも、アニエスも、シェリも。会場にいる人皆が信じられないといった様子である。

そんな中、トウヤだけが変わらぬ笑顔で上に――アルカリスへと声をかける。

「まぁ、それは気にせずに。入学許可プリーズ！」

『試験中にも私を……いえ、次は無いですよ。

……本当にいいんですね？』

「ん……あぁ、構わないさ。俺にはここでやらなくちゃならない事があるし、何よりも――」

一旦、空から目を離してシェリの方を見る。未だに某然とショックが抜けていない様子だったが、トウヤと目が合うと苦笑いをする。そんなシェリの頭に手を置き、撫でた。

「俺を受け入れてくれそうな奴もいるしな」

『……わかりました。とりあえず、彼女から手を離してあげてください』

「へ？……シェリ！？どうした！？」

「……うにゃ？」

シェリは顔が真っ赤に染め上がり、熱でも出したかの様に熱かった。さっきまでとは何かが違う、呆然とした表情でトウヤの事を見つめていた。

「シェリ……シェリーーーーー！！！」

「うにゅ～！頭がクラクラーっと……

『バカは放っておきましょう。
ジージジ学園長兼元老院議員。彼の入学を認めるように』

「は――」

アルカリスの言葉に返事をしようとするジージジだったが、それはライザが押しとどめてしまう。
ジージジに代わるように前へと一歩出て、空へ向けて口を開く。

「お言葉ですがアルカリス様。神であり、この学園の創始者であるあなたが、勇者に相応しく無い者の入学を認めるなど許されるはずがありません」

『彼はとても強いです。今年の生徒候補生達の中でも、今彼と互角に戦えるのは――見たところ一人だけです。そんな優秀な人材を手軽に手離すのも如何なものかと思いますが？』

「ですが……」

『あなたの言う事も尤もです。ですが、彼の考え方が間違っている

と言うのであれば、教師であるあなたが正してみてはどうでしょうか』

「……わかりました。アルカリス様がそこまで言うならば、私は従うだけです」

『ありがとう』

感情のあまり篭っていない声だが、不思議と心の底から感謝しているような気がした。

いまいち納得し切れていないライザだったが、その言葉で表情が少し緩んだ事に気付いた者は誰一人いなかった。

アルカリスの登場（姿は見せてないが）に会場の誰もが戸惑い、トウヤを敵意に満ちた目で見る事ができなくなってしまった。

それ程までの存在感。それがアルカリスという存在。それがアルカリスという神。

皆が不良の横を通るかのように身を小さくし、逆らう事なく言葉を受け入れていた。

『Ｎｏ．２５７アニエス、Ｎｏ．１００１トウヤを今年度のアルカリス学園新入生Ｎｏ．１、Ｎｏ．２とします』

「……はい。仰せの通りに」

ジージジの返答と共に、圧倒的なまでの存在感がスーッと消えていった。

緊張感から一気に解放された人たちは、スーハーと深呼吸を何度か繰り返していた。皆一様に冷や汗をダラダラとかき、中には着ている衣服がビチョビチョになっている人までいる。

そんな状況になって、全員が思った。

「トウヤ・アンサルトは何者？」と。

「……なんじゃろうな。アルカリス様とはワシも2、3度声を聞いたまでじゃ。呼びかけて出てくれるようなお方では無い」

「学園長でも……トウヤ・アンサルト。ここまで来たら見極めさせてもらいましょう。その力、その正体を」

☆☆☆

「ふぅ……」

深くため息をついた。

トウヤは今、入学式の会場の外にいた。缶コーヒーを片手に、会場の壁に寄っかかっている。

今会場内では試験が行われている。アルカリスの声を聞いた興奮か、又はトウヤ達の戦いに奮起されたためか、9割もの人達が試験に望んでいる。あの後体調が戻ったシェリも受けている中の一人だ。

その会場の外見は明らかにおかしかった。約1000人も収容しておきながら、10人も入ったら窮屈になってしまいそうなほど小

さい。これは、室内の空間と空間を入れ替える事により、見た目小さな建物でも１０００人を入れることが可能なのだ。
辺りを見渡せば、同じような建物がチラホラと建っているのがわかる。

「……」

ボーッとしながら空を見上げる。
空は銀色をしていた。鉄のようなメタリックな色。その前をオーロラのような色をしたものがプカプカと浮遊していた。
見ていて実に気分が沈む光景である。

そんな空を眺めながら缶コーヒーに口をつける。傾けると中から黒い液体が流れ、口の中が一気に苦くなる。けど、トウヤはこの苦さが好きだった。苦いものがあまり好きじゃないのだが、どうしてもコーヒーだけは苦くないと受けつけない。

「……やっぱり、影響を受けてるのかな」

「何の影響？」

突然声をかけられ、驚いて思わず缶を落としそうになる。
自分でも気づかない相当の実力者かと身構えるが、考えてみればトウヤはボーッとしていた。実力者どころかそこら辺の人が近づいても気づかなかったかもしれない。

見れば目の前に一人の少女が。
意思の強そうな青瞳、セミロングの青い髪を持つ可愛いと言うよりは綺麗と言う言葉が合う美のつく少女。

「……アニエス」

トウヤに名前を呼ばれた瞬間、眉がピクリと動いた。だが、すぐに元に戻ったためトウヤは気づかなかった。

「影響って何の話？」

「まぁ、ちょっとね……」

「ふーん……」

特に興味があったわけではないのか、それ以上の追求はなかった。それから暫く、どちらも何も話さなかった。１０秒、２０秒と時間が過ぎ、一分経つか経たないかという位でアニエスが口を開く。

「……一つ、忠告しに来たの」

「忠告？」

「えぇ。あたし達はこれからアルカリス学園の生徒になる。同じ学校に通うの。でも――――絶対にあたしに近づかないで」

「アニエス！？」

「言わなかったかしら？」

冷たく鋭い声。敵意に満ちた瞳。隠しきれず溢れる魔力。

アニエスの中の感情が高ぶっているのが手に取るようにわかる。

「あたしとあんたは敵よ。気軽に名前を呼ばないで」

「アニ……そっか。わかった……」

「あんたの事は誰にも言わないでおいてあげる。けど、いつかあたしがあんたを殺すから。それまで待ってなさい」

アニエスはそれ以上何も言わず、踵を返して急ぎ足で立ち去って行く。トウヤもアニエスも、どちらも辛そうな表情をしていた。

「そうよ……これでいいのよ……こうでもしなきゃ……」

その呟きがトウヤの耳へと届くことはなかった。

「……はぁ、何度体験しても辛いな」

拒絶の辛さ。痛み。それを嫌というほど味合わされてきた。とてつもなく苦い味。コーヒーと違って全く好きになれない味。

誤魔化すようにコーヒーを口に含む。

「……まず」

「そりゃ、女の子を泣かせてれば不味くもなるさ」

「違うな。お前がさっきからコソコソしてるからだ」

突然声をかけられても焦る事なく、何も無い空間を睨みつける。

「やれやれ……いつから気付いていた？」

「アニ……さっきの女が声をかけてきた時から。気配が一人分多かったからな」

そう言うと、トウヤが睨みつけている何も無い空間から、一人の男がトウヤが戦った偽魔王と同じように姿を現した。

見た目は３０代程だろうか。ライザよりは年上の印象を受ける。

「ははは……流石、元魔王だ」

「何でそれを！？」

驚くトウヤに、男は失望したようにため息をついた。

「そこで事実を隠そうとしないのか……まだまだだね君は。自分の力に、強さにまだ溺れている」

「誰だお前は！何で俺の事を知っている！？」

「そりゃ知ってるさ。君の憧れの彼に聞いたからね。そうだな……さしずめ私は彼の友人といった所か」

「俺の憧れ……？」

「原初世界の心優しき魔王――――ハクトゥーリヤ」

「！！！！」

声に出ないほど驚くとはこの事か。鯉みたいに口をパクパクする以外、体が石のように固まって動かない。

男はそんなトウヤを見て、楽しそうに獰猛な笑みを浮かべた。

「君が死んだと思い込んでいたハクトゥーリヤは生きている」

「どこだ！今どこにいる！答えろ！」

「会いたいだろうねー。君のトウヤって名前、ハクトゥーリヤから取ったんだろ？それぐらい憧れてる君だ。今すぐにでも会いたいだろうね」

「無駄口を叩くな！いいから答えろ！」

「ダメ。今の君には教えられない」

男の言葉にトウヤは体内で魔力を集中させる。力尽くでも居場所を聞き出すつもりなのだろう。

だが――

「だって君、弱いじゃないか。こんな所で魔王の力なんて使ったら、教師達にやられるのがオチだよ」

男の言葉に、思わず意識を逸らしてしまう。

「俺が……弱い？」

「そう。君は才能がある。君の憧れのハクトゥーリヤよりも高い才能が。でも、今の君じゃハクトゥーリヤにも勝てない。君が遥かなる高みへと、私やハクトゥーリヤ、神がいる所までおいで。そしたら私は、君を迎えにこよう」

「何なんだ……何なんだよお前は！遥かなる高み？迎えに来る？何が言いたいんだ！」

「時期にわかるさ。君の才能にこの学校。間違いなく君は高みへと到達する。その時君は、私と共に歩む事になる。その時を楽しみにしてるよ」

「待て、話はまだ――！」

トウヤの静止を聞かず、男は現れた時と同じように姿を消した。気配も消えており、もうその場にはいないのだろう。

ただ一人、トウヤだけが残された。誰もいない静かな場所。何だか寂しい気持ちにさせられる。

しばらく、そこから動く事ができなかった。

第六話（後書き）

トウヤ「メインヒロイン、シェリ来たあああああああ」

アニエス「え！？あたしは！？」

これにて、第一章は終了となります。
次回からは第二章が始まり、学園生活が始まります。
次章も読んでくれると嬉しいです。

アニエス「ねぇ！？メインヒロインあたしじゃないの！？ちょっと、無視！？」

第七話（前書き）

第二章、学園生活編開幕です。
第一章の反省を第二章では繰り返さない様にしたいと思っています。

第七話

――キーンコーンカーンコーン。

学校で普通に耳にする音の直後、校内は一気に活気に満ち溢れた。
時刻は正午過ぎ。退屈な授業を耐え抜き、腹を減らした生徒達が昼休みを迎え、ワイワイと騒いでいるのだ。購買へと駆け出す者、食堂目指して教室を後にする者、弁当を広げ教室に留まる者。皆それぞれのスタイルで昼食を取りはじめていた。

シェリもまた、昼食のために席を立つ。だが行き先は購買や食堂ではなく、同じ教室内の真ん中の一番前の席――正確に言えばトウヤの元へと。
トウヤは机に伏したまま寝ていた。先程まで行われていた授業は勿論、最初の授業からずっと寝たままである。この状態になると揺すろうが耳元で叫ぼうが目を覚まさない。けど、シェリはトウヤを一発で起こす呪文の言葉を知っている。

「遊びに行きましょう」

言った途端、ガバッと勢いよくトウヤが跳ね起きた。
ボーッと寝ぼけている眼で辺りをキョロキョロと見回す。何度か首を動かすとシェリの方をジーっと見つめるが、寝起きで脳が働かないので誰なのかわからないようである。少しすると頭が冴えて来

たのか、ポンと手を打つ。

「ぁー……おはよう、シェリ」

「もうこんにちはですよ、トウヤ君」

クスリと笑うシェリを見て、少しばつが悪そうに顔をしかめた。

「お昼休みになりました。ご飯一緒にどうですか？」

何も持っていないシェリの手に、突然弁当箱の包みが現れる。ピンク色の可愛らしい物と、大きめの紺色のシンプルな物の二つ。紺色の方をトウヤの方へと突き出しながら、ニコリと笑顔を浮かべる。

「あぁ。いつもありがとな。助かる」

「いえいえ、わたしが勝手にやってるだけですから」

ニコニコしているシェリを見ていると、自然とトウヤの表情にも笑顔が浮かんできた。

トウヤは紺色の包みを受け取ると、そそくさと席を立ち教室を出て行く。シェリは慌ててその後を追いかけ、教室を後にした。

トテトテと小走りで追いかけているのだが、足速に先に行くトウヤとの差は中々埋まらない。途中、誰かが何かを言っていた気がしたが、そんな事はどうでも良かった為何を言っているか全く頭に入っていなかった。

ようやくトウヤに追いついた時には既に校舎を出ており、なぜかシェリの息は激しく乱れていた。

「ハァハァ……トウ、ヤ君……速すぎ……です……」
「速くないって。普通に歩いていただけだから……何でそんな疲れてるんだ？」
トウヤの言葉に、シェリは呼吸を整えながら睨みつける。だが、シェリが睨んでも特に怖くない為簡単に受け流す。
「さて、飯にするか」
「……トウヤ君の、ばかぁ！」
そんな事はどこ吹く風、トウヤは近くにあるベンチに腰かけると、シェリから受け取った紺色の包みを広げ始める。
シェリはその様子を見て、一度ため息をついてからベンチに――トウヤの隣に座った。膝の上にピンクの包みから取り出した弁当箱を乗せ、食べようとした所でトウヤが口を開く。
「……がな、耐えられないんだ」
「え？」
「皆の俺を見る視線が耐えられないんだ」
「――――」

思わず、言葉を失った。それと同時に自分を許す事ができない、そんな感情がシェリを襲う。

「あの……すいません」

「シェリが謝る事じゃ無いさ。入学してから一月、未だに周りとの距離が詰められない俺が悪いんだ」

「トウヤ君……」

入学式から早くも一ヶ月が過ぎた。

およそ９００人の候補生達が偽魔王に挑み、勝って入学の資格を手に入れたのはわずか２１６人であった。だが、これまで毎年１５０人前後しか入学できていない事実から考えると、今年は非常に多いと言える。

シェリも合格したうちの一人。

最初トウヤはシェリが合格した事に関して驚いていた。ポワポワーとした雰囲気を持っている為、戦うとかそれ以前に剣すらまともに持つ事ができそうにない。そんなシェリが、偽とはいえ魔王を圧倒したという話である。

まだまともに戦っている姿を見たことがない為、どうしてもそんな強い力を持つようには見えなかった。

力のない正義など、偽善にすらならない妄想に過ぎない。けれど、

シェリには力がある。魔王と戦えるだけの力が。
だから彼女の口にした「魔王と仲良くできる」というのは正義になる。例え偽善だとしてもそれは正義の一つ、勇者となれる。
だから、シェリは周りと仲良くやっていた。

そう、トウヤと違って。

一ヶ月が経っても、トウヤは孤立していた。入学式の発言が尾を引き、周囲に受け入れられない。それどころか、敵意に満ちた視線を向けられ、中には声に出して罵倒してくる者までいる。
それが耐えられないから、トウヤは急いで校舎を出ていった。
入学式から変化の無い環境。トウヤは一人ぼっちだった。魔王に対して敵意を持たないシェリはよく一緒にいるが、それでも実質一人。
シェリが普段一緒にいるのは、人間という偽りの仮面を被ったトウヤであり、本当のトウヤは魔王の力を持つ勇者の敵である。それはつまり、シェリと本当のトウヤは――他人でしかなかった。

それが入学式から変わらない現状。
でも、変わった事が二つある。

一つはシェリのトウヤに対する呼び方が、「トウヤさん」から「トウヤ君」になったこと。
そして、もう一つが――

「トーウーヤー！！」

その声を聞いた瞬間、トウヤの体が固まった。そして、油のきれたロボットのように、ギギギギという音が聞こえそうな動きで声のした方に振り返る。

その瞬間、「うげっ」という声とともに嫌なものを見たという表情に変わった。

そこにいたのは、アルカリス学園の制服を着た笑顔を浮かべる少年。

トウヤよりも一回りもニ回りもでかい、2メートルぐらいはあろうかという長身。制服の下には鍛え抜かれた筋肉があるのだろう、パンパンになっていて実に窮屈そうである。燃え上がるような真っ赤な短髪をオールバックにしたその姿は、思わず目を逸らしそうになるほど怖い。

本人はニカッとさっぱりした笑顔のつもりなんだろうが、小さい子は思わず泣き出してしまいそうである。

その腕には、本人と同じぐらいの体積のパンが山のように積み重なって抱えられていた。

「こんな所にいたのか。おや、シェリちゃんも一緒か」

「……」

「いやー、探したぜ。俺がパン買いに行ってる間ぐらい待っててくれよ」

「……」

「まぁいい。とりあえず飯食おうぜ。そんで、その後は俺と――」

「だあああああああああああああああああああああああああ！！！」

立ち上がりながら絶叫するトウヤに、シェリも少年もキョトンとする他なかった。

「いい加減にしろ、グラッツ！」

指さしながら怒りを露わにするが、グラッツと呼ばれた少年は気にする気配がなかった。

「うぉっしゃ！俺の名前をようやく覚えたんだな！ナイスだ、ナイスすぎるぞトウヤアアアアアアアアアア！」

「うざい！暑苦しい！どっか行け！」

「トウヤ君言い過ぎじゃ……」

「流石シェリちゃん！トウヤと違って話がわかるな！」

「だあああああ！シェリを味方につけるな卑怯者！」

「釣れない事言うなよー。俺とトウヤの仲だろ？」

「つまり他人だろうが！うぜえええええええええ！」

入学式とは違うもう一つの変化、それはグラッツに――付き纏われているという事だった。

☆☆☆

ぎゃあぎゃあ騒ぐ三人（主にトウヤ）を遠くから眺めている少女がいた。
小柄なシェリよりも更に小さい、下手をすれば小学生に見えてしまう。肩のとこで切られた亜麻色のショートヘアー。色素がなさそうな真っ白な肌。そして、その背には持ち主よりもでかい大剣。
波の無い静かな湖面のように、その表情には何の感情も浮かんでいない。トウヤに対する怒りも、侮蔑も、不快感も。ただただジーッと見つめているだけ。まるで何かの実験を見ているかのようにも見える。

「こんな所で何をしているのかしら？」

そんな少女に後ろから別の少女が声をかける。
いきなり声をかけられても、その表情には変化はない。ただ無機質に、ロボットのような鉄仮面がそこにはあった。
後ろを振り返ると、そこにいたのは意思の強そうな青い瞳、セミ

ロングの青い髪を持つ少女。

「……アニエス」

「いきなり呼び捨てにするなんていい度胸ね」

アニエスがキッと睨みつけるが、少女はそれでも何の反応も示さない。さっきから変わらない、観察するかのような眼。そんな眼と視線が交差し、若干不愉快そうに眉を顰める。

「別に……何も。ただ見てただけ」

「見てた？」

質問に少女は答えなかった。アニエスに背を向けて、どこかへと立ち去って行く。

アニエスはそれを追いかけて問い詰めることもせず、チラリと今まで少女が見ていた方――トウヤ達の方へと視線を向けた。

「……フン」

そして、少女が行った方向と正反対の方へと歩き始めるのであった。

第七話（後書き）

新キャラ、グラッツ登場！
こういったキャラは必須ですよね、うんうん

第八話（前書き）

今回はむさい男二人の話。
しかし、相変わらず戦闘シーンをうまく書けない……

第八話

「ところで……前から思ってたんだがよ」

「何だよ。くだらない事だったらぶっとばすぞ」

あれからトウヤは必死になってグラッツを追い返そうとした。
だが、トウヤが何を言ってもグラッツは豪快に笑いながら堂々と無視。力尽くで解決しようにも体格に差がありすぎる。パワー勝負ではずっとトウヤの方が不利であった。
しばらくは抵抗を続けていたが、昼休みという貴重な時間をどんどん消費していくうえに、シェリがあっさりとグラッツを受け入れてしまったために諦めた。
そして今、三人で一つのベンチで昼食という実に窮屈な状態に陥っていた。特に、真ん中にいるトウヤはたまったもんじゃない。

今機嫌悪いよー、と声に多分に含んだ言い方をするが、グラッツがそれに気づく気配はない。
グラッツ（こいつ）の話なんて話半分に聞こう、と弁当の具を箸で掴む。出汁のきいたさっぱりとした卵焼き。毎回弁当に入っているが、この味が好きなトウヤは一向に飽きる気配がない。それをじっくりと味わいながら咀嚼する。

「トウヤとシェリちゃんって付き合ってるのか？」

「ブッ――――――！！」

トウヤの口から盛大に卵が飛び散った。

それは両隣にいたシェリとグラッツの方にも飛んだのだが、二人は即座にベンチから離れる事で被害に合う事はなかった。

「きたねーな」

「がっ、げほっ！……いきなり何言ってんだ！」

顔を真っ赤にしながら怒鳴るトウヤを見て、グラッツはニヤニヤとし始めた。ただでさえ顔が怖いというのに、そんな表情をすれば子供が泣き出してしまいそうなほどおっかない。

「おー、おー？こりゃ脈有りかー？」

「アホか！俺達はそんなんじゃねぇよ！なぁ、シェリ！」

「はい！」

「……」

満面の笑みで答えたシェリに、トウヤは（精神的に）大ダメージを食らいその場に項垂れた。

その様子を見てグラッツが腹を押さえて大爆笑しているが、ショックのあまりそれどころではない。

シェリはと言うと、自分が何を言ったのかわかっていない様子で、小さく首を傾げている。

「ヒ～ッハハハハ！アー……笑わせてもらったぜ」

「……お前いつか殺す」

トウヤがギロリと睨みつけると、グラッツは笑みを浮かべる。先程までのおかしくて笑ってる時の笑みではない。獲物を見つけた獣のような、獰猛な笑みを。

「おぅ、殺せるなら殺してみろ？今すぐ殺してみろや。できるんなら、だけどな」

「え、いや、い、今？今はちょっとめんどく……気分じゃないかなー」

「つまり、負けるってわかってるから戦わないと。ほー、へー？」

「……ほう？」

これが安っぽい、よくあるベタな挑発だという事はトウヤにもすぐにわかった。

だが、それを平気な顔をして受け流せるほど、トウヤは人ができていない。

「いいだろう……その天狗へし折ってやるよ」

「できるもんならな」

二人の間を、火花が激しく散る。

トウヤは激しく睨みつけ、グラッツはワクワクと楽しそうな目をしている。

「え……え？」

ただ一人、シェリだけがわけが分からず混乱していた。

☆☆☆

「ようやく俺の誘いに乗ってくれて、嬉しいぜトウヤ」

「まったく……何で俺みたいな一般人を……」

二人は今、学園内に建てられた戦闘用アリーナにいた。

ここも入学式の会場と同様に、見た目は特に大きくないが中はずっと広い。

直径３００メートルにも達する円形のフィールド。その周りを観客席がグルーッと囲んでいる。観客席には強力な魔法壁が貼っており、例え全校生徒が一斉に攻撃をしかけても観客席には被害がでないよう設計されている。

それはつまり、中央で戦う人達は遠慮なく本気を出せるということである。

ちなみに、シェリは観客席にて二人の様子を見守っている。

「一般人？ハハハッ……冗談はよせや。その力は神だって認めてんだぜ？」

「買いかぶりさ。俺はそんな強いやつじゃ――」

「買いかぶりでも何でもねぇ。トウヤは強い。俺が言うんだ、間違いない」

「その確信はどっから来るんだか……ほんとわかんねぇ奴だよ、お前は」

トウヤは呆れたようにため息をつき、肩を竦めた。

「一ヶ月前の入学式、俺は震えたね。敵を敵としない圧倒的なまでの力、他を威圧する恐ろしいまでの存在感。全身がウズウズして仕方なかった。今すぐこいつと戦いたい、そんな欲求に狩られたんだぜ？俺をこんなにした奴が、弱いわけがねえ」

「……ほんとお前は……始めて会った時から――」

「変わらねえよ、たったの一ヶ月じゃな。俺はちゃんとまだ――」

「「狂ってる」」

そう、グラッツは狂っている。

狂うと言っても、頭のネジが外れたようなイカれた狂い方ではなく、いわゆる戦闘狂。戦う事に意味を見出し、戦う事だけを命とする。例え相手が自分よりも強いとしても――否、相手が強ければ強いほど戦う事に喜びを感じる。

それが戦闘狂。

それがグラッツという男の本質だった。

だからグラッツは今、トウヤのとこにいる。

トウヤが勇者に相応しく無い言動をしようが、周囲がトウヤを敵視していようが、そんな事はグラッツからしてみれば「知ったこっちゃない」。

入学式の時にグラッツは魅せられた。トウヤの力に。その強さに。相対したいと思った。戦いたいと。倒したいと。

ただそれだけである。グラッツの行動にそれ以上もそれ以下もない。

あるのはトウヤみたいな強い奴と戦いたいという、本能だけだった。

「神はお前が新入生の中でも最強の部類に入るとか言ってたな。そして、それに対抗できるのはわずかに一人だけ……ほんと楽しみで楽しみでたまんねえぜ、トウヤよ。その一人が俺かどうか、気になって仕方ねえ！俺は今完全に恋してるぜ！」

「……ごめん、男はちょっと」

「俺もそっちの趣味はねえぞ？今全力でひいたよな！？」

「あ、うん……グラッツにそういう趣味はないよな。わかってる、俺はちゃんとわかってるぞ」

「その無駄な心遣いが痛いぜ！

じゃなくてだな、御託はいらねえ。さっさと始めようぜ」

「まぁそうだな。これ以上貴重な昼休みを削るわけにもいかんし……とっとと終わらせるか」

トウヤの手に一振りの剣が突然現れる。何の飾り気もない、大量生産品のようなどこにでもある普通の剣。それを片手に、特に構える事もせずにグラッツの方へと一歩、また一歩と歩み寄って行く。

「余裕じゃねえか。入学式の時のような盛大な魔法も使わず、剣だけで俺とやるってか？なら、俺も……」

グラッツが横に手をかざすと、手が透明になったかのように消えた。ゆっくりと手を引いていくと、それに合わせて消えていた手が姿を現していく。そして、手が全て見えるようになると、まだその先がある事がわかる。

時が経つと共に、その形が鮮明になっていく。

燃え上がる炎のような、真紅の色。目に付いたのはそれだった。血の色とは違う、禍々しいながらも美しく鮮やかな赤色。柄から切先まで真っ赤に染まった、刃渡り２メートル幅８０センチはあろうかという大剣。

それがグラッツの手に握られていた。

（何だ？今魔力を感じなかった……まさか俺でも感じとれないほど精巧に魔力の流れを隠したのか？）

魔法を使う際、当然ながら魔力を消費する。魔力を消費する時は魔力が体内を巡り、その際に魔力はどうしても漏れてしまう。その

漏れだした魔力を感じ取る事によって相手が魔法を使うかどうかを見極められる事ができる。
魔法に長けた者ならばその魔力の流れを、漏れ出す事を極力抑える事ができる。そうする事によって相手よりも一歩、優勢に戦いを進める事ができる。
トウヤほどの者ならば当然、その技術を習得している。そして、逆に相手が隠そうとした魔力の流れも感知する事ができる。
だが、今グラッツから魔力の流れを感じとれなかった。考えられる原因は二つ。
一つはただ単純にグラッツの技量がトウヤを上回っている。
そして、もう一つが――

「剣で応えなきゃな！」

考え込むトウヤを尻目に力強く地を蹴ると、とても大剣を持っているとは思えない速度でトウヤへと迫る。
だが、それはあくまで大剣を持っているとは思えないという、普通の人視線での事。トウヤの目には速く感じるどころか、むしろ遅すぎる。

（魔法で身体強化をしていない？それともしていてこの程度か？）

すぐ近くまで迫ってくると両手でしっかりと柄を握りしめ、大きく振りかぶって一気に打ち下ろして来る。それをトウヤは持っていた剣で防ごうとする。
元々大剣というのは斬るというよりは潰す事に特化した剣である。その重量ゆえに、振るわれる一撃は例え防御しようが防御を打ち砕くか、防御ごと相手を吹き飛ばす。

つまり、トウヤの持つ剣では防御にもなりやしない、はずだった。

「やっぱりな」

グラッツは思わず嬉しそうな声を出す。見た目どこにでもある普通の剣が、大質量の大剣の一撃を意図も容易く受け止めてしまった。こんな普通ならあり得ない事、グラッツが歓喜しないわけがない。

「それもタダの剣じゃなさそうだな」

「お前こそ。それもとか言いやがって。何を隠してる？」

「教えてくれたら教えてやるぜ？」

「教えてもらって嬉しいのか？」

「フフ……ハハハハハッ！いいぜ、いいぜトウヤ！わかってるじゃねえか！」

突然声を大にして笑いだしたグラッツを訝しむ事もなく、トウヤの表情にもニヤリとした笑みが浮かぶ。

「そうさ、戦う以上相手の手の内は知らないに越した事はねえ！それを如何にして相手に出させるか、それが戦いの醍醐味ってやつだ！」

突然、グラッツの両肩に黒い筒のような物が現れる。筒からシューという音と共に光が発生し、それを見たトウヤの背を冷たいものが伝っていく。

剣を滑らせて大剣から離すと、バックステップで地を蹴り、わず

か一歩で１０メートルほど距離を作った。

そんなトウヤに、両肩の筒から細く伸びた線のような光が襲う。アニエスの使う『閃光（テラ）』と同等以上の速度で迫るそれを――剣で正面から受け止める。壊れる事もなく、鉄壁のシールドのように光からトウヤを守っていた。

だが、グラッツの攻撃は止まらない。黒い筒から伸びた光は止まる事なく、トウヤを襲い続ける。このままグラッツが別の手段で攻撃をしてくれれば、足を止められてしまったトウヤには避ける術はない。

「くそっ……！『岩壁（フェルゼン）』！」

グラッツの目の前に巨大な岩が立ち塞がる。二人の間に現れた岩は即座に光に打ち砕かれてしまうが、トウヤには十分であった。

グラッツが岩を砕いた時には既に、そこにトウヤの姿はない。

「ふぅ、今のはちょっと危なかった」

どこに行ったと辺りを見回すグラッツの背後から、その声はした。

「……流石トウヤ。光線砲をあの岩で防いだ一瞬で後ろに回り込むなんてな」

後ろを振り向く事もせず、またトウヤも後ろから襲いかかる事はしない。

「結構危なかったんだぞ？お前の事を先入観を持って見ていたからな」

「ま、普通はそう思うだろう。実際今この学校で俺と同類なのはいないしな」

「だろうな。でも、さっきの攻撃で確信した。魔力を感知できなくて当然だわな。だってそもそも、魔法を使えないんだからよ」

「ビンゴ。その確信は正解だ」

「やっぱりな……グラッツ、お前は――――科学世界からの勇者なんだな」

第八話（後書き）

え？シェリが空気？
ははは、そんなバカな……あれ？

一応、年内最後の更新となります。
また来年お会いしましょう。

それでは皆様、少し早いですが良いお年を！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9871y/

最弱勇者レベル100

2011年12月28日23時56分発行